

博物筌
冬



改正 月令 博物 筌冬之部

十月部目錄

△印ハ俳借の季
をりの物あり

養生の法。雨風の勢。米の豊凶。妙藥其外人家。重宝の事ハ取々ある。史目錄ハハミル。

發端

冬由來
各異俗

發

青

卦 陽生 異俗

了

立冬節

十一月 小雪 節

了

十月令

此部ハ十月日の定アハる事支の定アハる事と懸りある事

全麥の旬

更衣

了

衣服の式

拜壇

了

進炉炭

煨燗食

了

炉開

神送

了

御玄猪

能勞餅

了

達磨忌

殘菊宴

了

十夜

大和興福寺法花會

了

十月目錄



| | | | | | |
|-----|---------------------------------------------------|------|----|-------|---|
| 十日 | 讚皇維祭 | 寺 | 十日 | 南維磨會 | 寺 |
| 二十 | 芭蕉忌 | 寺 | 三十 | 御命構 | 寺 |
| 中 | 水官解厄 | 寺 | 元 | 元 | 寺 |
| 中 | 大社神事 | 神あり | 中 | 惠比須講 | 寺 |
| 六 | 都聖國師忌 | 寺 | 六 | 惠比須講 | 寺 |
| 五 | 京法勝寺大集會 | 寺 | 八 | 極尾虫供養 | 寺 |
| 日 | 神迎 | 寺 | 日 | 神迎 | 寺 |
| 十月令 | 此部は八日の定より十月一ヶ月の事をあつむ | | | | |
| 御取越 | 寺 | 茶の口切 | 寺 | | |
| 巨燧明 | 寺 | | | | |
| 十月令 | 此部は十月の時候より十月の事をあつむ | | | | |
| 初冬 | 寺 | 初霜 | 寺 | | |
| 時雨 | 初雨 川音時雨 禰一がれ 小夜時雨 柳一がれ 北一がれ 片一がれ 涙一がれ 松風一がれ 落葉一がれ | | | | |

| | | | | |
|-----|-------------|---|-----|---|
| 名木 | 木枯 | 寺 | 木枯 | 寺 |
| 初雪 | 初雪 | 寺 | 初氷 | 寺 |
| 冬ざり | 冬ざり | 寺 | 冬籠 | 寺 |
| 冬構 | 冬構 | 寺 | 閉北窓 | 寺 |
| 草木 | 此部は十月の草木と集め | | | |
| 名木枯 | 名木枯 | 寺 | | |
| 冬椿 | 冬椿 | 寺 | 早咲椿 | 寺 |
| 残菊 | 残菊 | 寺 | 冬椿 | 寺 |
| 芙蓉花 | 芙蓉花 | 寺 | 冬菊 | 寺 |
| 水仙花 | 水仙花 | 寺 | 八手花 | 寺 |
| 茶の花 | 茶の花 | 寺 | 山茶花 | 寺 |
| 歸花 | 歸花 | 寺 | 寒梅 | 寺 |
| 枇杷花 | 枇杷花 | 寺 | 室の梅 | 寺 |
| 榊の花 | 榊の花 | 寺 | 散紅葉 | 寺 |

△麥蒨

△枯蘆

△麥蒨

△枯柳

△落葉

△麥蒨

△木葉の雨

△木葉の雨

△木葉の雨

△朽葉

△燕

△燕

△大根

△冬木の樹

△冬木の樹

△雪の下

△松の花

△松の花

△生類

爰より十月の鳥けだりの魚虫のこゝをあつめたるは

△鶯子啼

△鶯子啼

△鶯子啼

△必用

此部より十月一月の天氣乃見ゆく其外必用の報とのも

△破軍向方

△日刻

△日刻

△出行作事

△樂事

△樂事

△天氣

△占候

△占候

△養生

△衣服式

△衣服式

△生花立

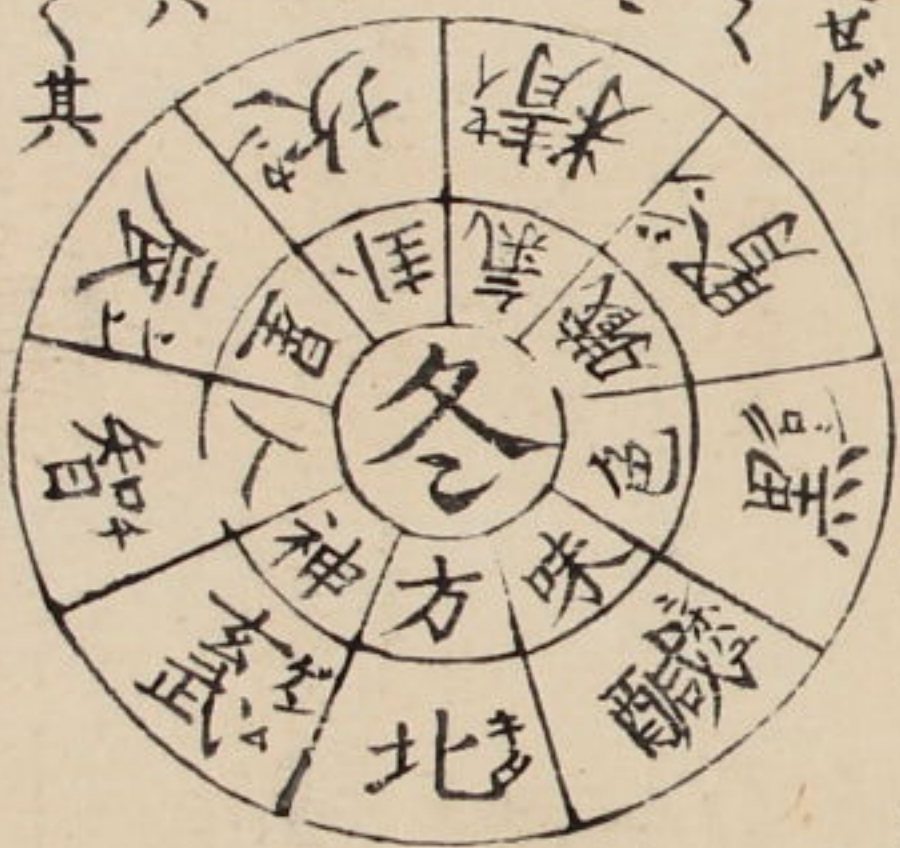
△料理献立

△料理献立

十月部目錄終

月令博物笈冬の部發端

九き内を書るる冬の氣の旺る所月令ふ日天氣より騰り地氣下り降る天地通せば閉塞し冬とありといふ註



騰り地氣下り降る天地のく其位を正し其をいふ猶委しきといふ鳥全といふ所みよるん

冬由來 釋名小曰冬終之萬物終成る所以と有これハ

冬ハ二年の終までよろぶの物成就せりといふ事也。和語曰冬をふゆと訓せしハひゆといふ事とふといと

五音相通なるなり

冬爲主 方ハ北とハ易の統圖小曰日冬ハ北方の黒道を行

これを北陸と云ふと有るは、北を
冬の方と云ふ也。味ハ鹹と云ふ也。
とる事ハ冬ノ氣ハ水ニ屬する也。
海水の塩味と云ふ也。味と云ふ也。色を
黒しと云ふ令小天子玄堂の左ノ
居り玄路と云ふ也。鐵驪は駕し
玄斨と載黒衣をきると有る
玄堂ハ北の方の堂と云ふ也。玄路ハ
黒き車鐵驪ハ云々むまじ事玄
斨ハ云々きは云々の事也。云々云々
黒色と主と云ふ也。臓ハ腎
と云ふ也。五臓の内也。腎ハ水を主
とる臓也。冬ハ配當する也。
氣ハ精と云ふ也。腎精と云ふ也。卦ハ坎
と云ふ也。坎ハ水ノ象也。星ハ辰
と云ふ也。辰星北にあり。人ハ智
と云ふ也。腎ハ蔵ノ官也。人ノ智
恵と云ふ也。腎精と云ふ也。智ハ冬に
當ると云ふ也。神ハ玄武と云ふ也。黒
き蛇と云ふ也。以て冬ノ神と云ふ也。

冬異名

玄英。顛頊。玄冥。上天。
清冬。三冬。九冬。

異名註

爾雅の註曰氣黒く
して清英と云ふ也。顛頊と
禮記に其帝ハ顛頊と有。玄冥ハ
これハ禮記に其神ハ玄冥と有。

上天ハ禮記に天氣上騰ると
有と云ふ也。三冬ハ東方朔の疏に
出ると云ふ也。冬三月の事と云ふ也。
九冬ハ元帝纂要に冬と云ふ也。九冬
と云ふ也。清冬ハ皮日休の詩に冬を
清冬と云ふ也。云々云々ハ雲
御鈔に云々雪氷と云ふ也。露のこ
と云ふ也。云々云々ハ云々云々
拾遺集に云々三冬と云ふ也。三冬
と云ふ也。漢土に三冬
と云ふ也。同じ也。

哥秘蔵 きまつけ 小野峯雄
きまつけとむらさき末ハ八重重辰
立田れ山とむらさきめなくに
夫木 為相

波のき入江の南まきうらうら
お日れそらぞそのむげなき

非を言とおしむ降はしそがき支考

ゆたが 冬の朝の事
歌蔵玉集

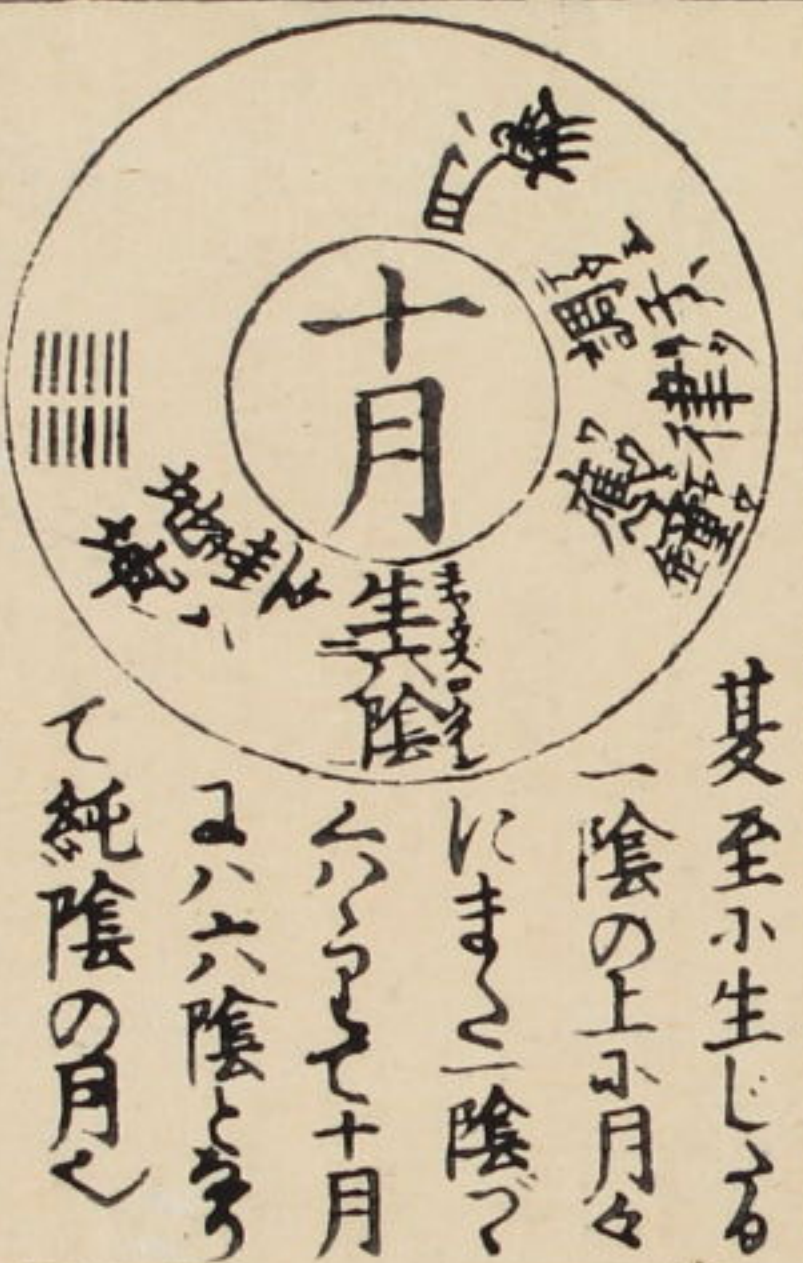
ゆたがよおきてええれが白雲乃
庭もそらに降よけこのれ

らひんむめ 冬を主の神く妻の
神を依保姫とい

夏の神まつ姫とい秋を鈴鹿姫
といいつきも童蒙抄に出る春

秋ハ傲の季に用ゆるゆも雨に委
しく註はれまきも神祇おはる
の氣を主る造化の神そはるなる
右の外三をみくるる季節れ
りの別三冬の部有

十月の部 △印と記は分ハ
季と物



調子ハ律子ハ應鐘といハ水
の成長しるハ禮記月令三出應

陽ハ應ざるなり鐘ハ動くと
ハ心よて萬物動きさうらと

卦ハ地坤とハ上の圖けとく極
陰よて地のうらと

十月異名 △陽月 △良月 △孟秋
△上冬 △開冬 △玄冬

秦正 △小春 △初冬
△秋月 △十月 △十月

△初冬月 △小六月 △十月

異名註。陽月と此月一陽也

雅と出たり。良月ハ左傳と出

より十の数の満る事を良と

より左傳の注に見えたり

孟冬ハ月令は出はしちの冬と

の義也。上冬ハ纂要に出これ

もはゆめの冬といふ事也。開冬

ハ顔延之の詩は作まり冬の

と云ふ事也。春ハ事文類聚ハ十月

は出てはゆめれ冬也。秦正ハ歲

時記出秦の世の正月ハあり月

といふ心也。小春ハ事文類聚ハ十月

のくはして春のくきといふ事あり

上無といふハ陰陽の數ハ下より九

まで十より上の數はよつて此月上無

といふ。神無月といふハ此月神々出雲國

集るハ故名といふ出雲ハ神有月と

より又一説に此月の異名上無といふ

より俗誤つて神無月といふ事

又真淵の説ハ此月雷聲と出

たり也。雷無月といふといひ

此月伊弉册尊崩し十月

也名つくと世間問答に出

貝原氏の説ハ卦ハ乾

として純陰ハあれハ陽

未復陽

をきの月ハ神ハ陽の司也

此月陽

かきの月の神無月といひ

諸神出

雲ハあつたり

跡ハくはなき事とあり

其外

説多し委しく日本歲時記

に

あるは然ども風雅の道ハ

此論

不狗神なき心とよむハ

風情あり

てよハ次子證哥と出し

作例ハ次

秘藏

神

莫傳

神

千載 十月月 道因法師

何し吹ひらけむ風の涼とに
あられ降る十月月

新亭 十月月 高光

十月月 涼の紅雲のちる雨の
そこはくなくぬかぬき

十月月 野水

十月月 野水

十月月 野水

十月月 野水

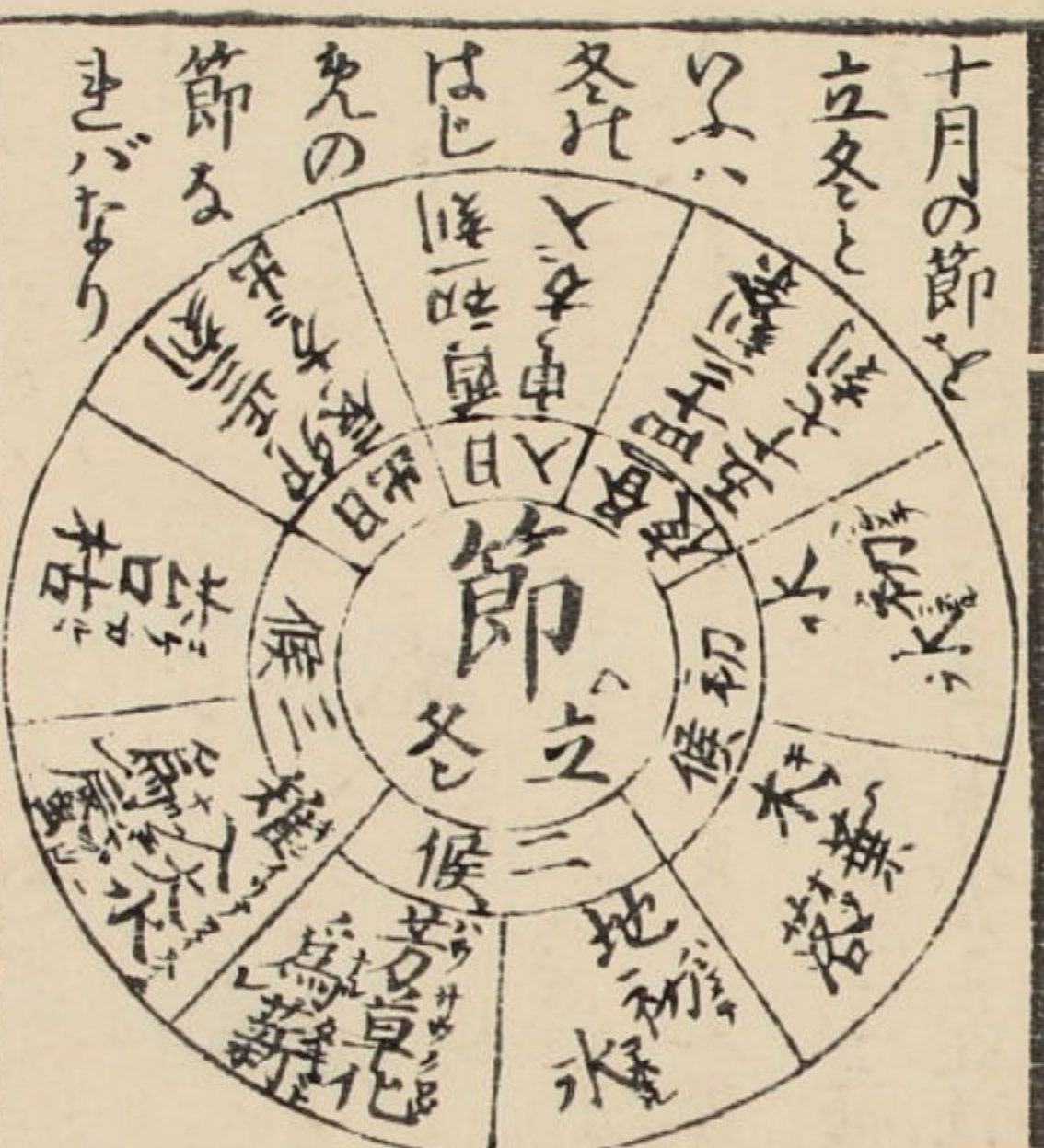
十月月 野水

十月月 野水

十月月 野水

十月月 野水

十月月 野水



十月の節と

立冬と

冬は

はじ

光の

節を

まじり

此頃水始て氷...

つとを。地始て氷...

水が氷...

よきふらひの有し...

月令の注は...

とひ心...

よわらげ...

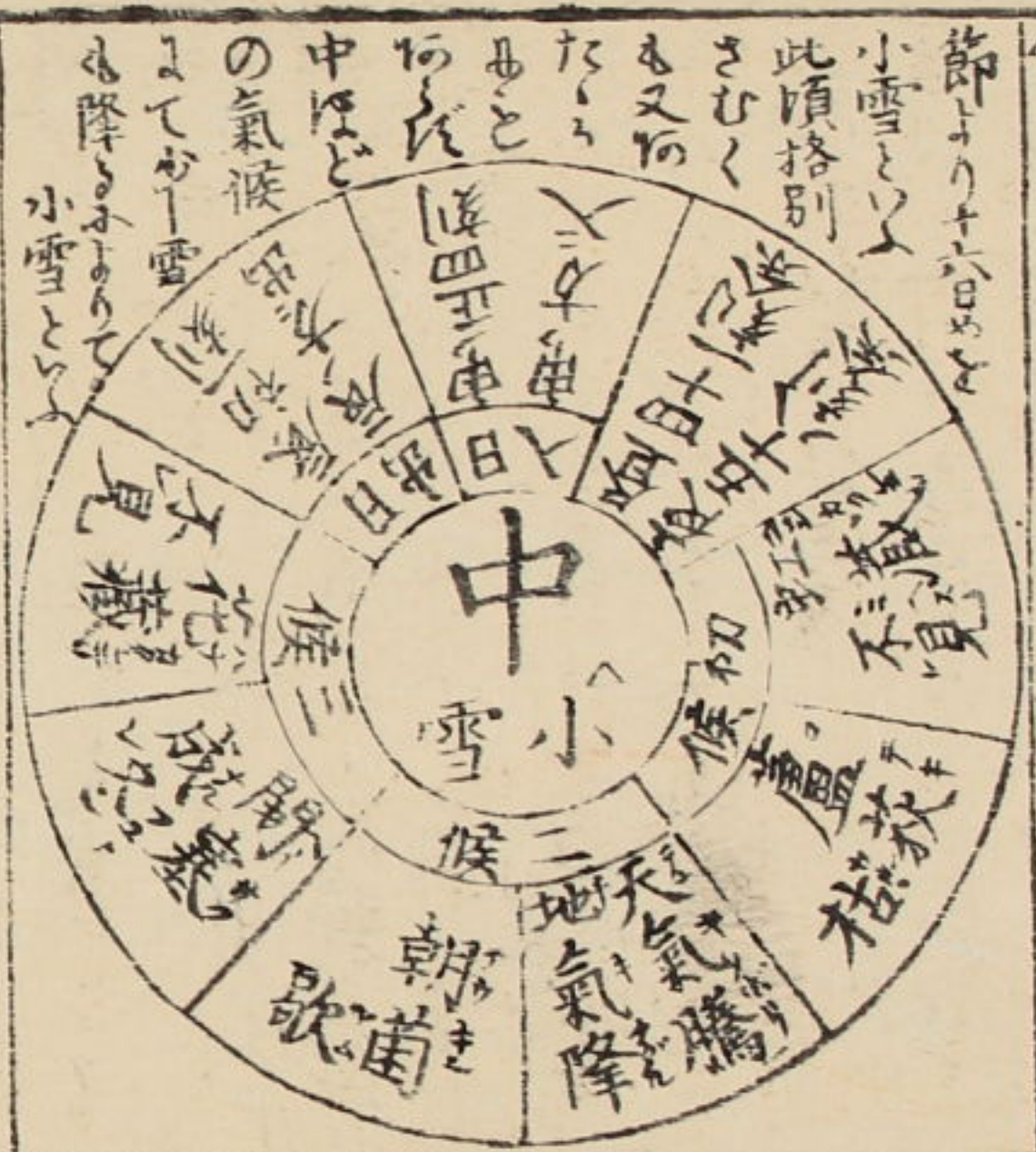
千載...

節の占候

壬子まれば来年大熱し節の日晴れ
来春雨多し北風あれば六畜不まふひかり

小雪

中の名七十二候の州木七十二候
日出る昼夜長短の左に記し



虫藏不見、此頃より来三月まで
虹ふらふときどきどき、世教枯あしはき
枯るの天氣騰地氣降と、天の陽
氣去りて地の陰氣下る也、寒氣
ぞんぐはりのよまよと、朝菌歌を
とらびし生せざる也。閑塞成冬と

陽氣きざりて寒き冬となり
なり。花藏不見ハ花ハ大抵陽氣
を得てひらくもの也、陽氣なき
時なればかされて不見なり

日令

此部は八日の定する事
免る支の定する事出

朔

今日房事と屏ふつしむし

朔

今日天子御装束と
改めつて南殿お出

御ちりて節會行つて二献の後
氷魚と群臣より奉根元出

哥

元弘立后屏風
活れる竹代の頁とよみしを
大宮人よりよみたり

非

坊求まふ色袖の故也有

朔

更衣 十月朔日先づ御衣之つり
掃部寮夏の御装束と

撤て冬の子改めたり、天皇南殿
お出御ありて節會行つて是を孟

冬の旬より。冬更ほくふ。季四月之
餅あなを八袖と成り更衣 李下

朔 衣服式 諸家より来年三月晦日
迄冬袍を着せしむる事

朔 拜墳 唐より今日貞氏にも先
祖の墳と拜し祭より貞原

説く本朝より今日先祖と祭るべしと
へり唐日本の祭より委しく歳時記出

朔 進爐炭 唐より今日有司爐に燧炭
を奉りて事支類聚より出

朔 燧燗食 燧人十月朔日多
事支類聚より出燧燗と作て節物より煎

楚の人多く燧燗と食し或ハ糖と為
そ事支類聚より出燧燗とハ酒の淨の

こがたるやる物又燧燗の事支類聚
そつハ蒸裏とつてつくる物といふ

朔 爐開 燧燗會ハ爐開會今日
炉と開き三月廿日炉とふま

唐より今日炉を開き炉中にて肉といふ
己飲食は是とたんふ會より歳時記出

此例より本朝茶人此日より炉と開
き賓客と茶を喫ハ詩有 歳時記出

神送 △神の旅△神の留守此日諸
神出雲の大神ハ臨幸し

といり委しく日本歳時記に
出より面白き事といふべし

非 酒より飲まむ神の不之弘野水
かつきの神を授けし蘇守

狂 馬がらうて風を神のかしま立
本の葉さつくをそいでり 真魚

支 御玄猪 △玄猪餅 △御嚴重
△亥の子ハ能勢餅

昔ハ山猪を奉る事 日本記等出
○應神天皇の御代より毎歳

亥の月亥の日を祝ひて御
玄猪の餅を奉るべき詔ありて

攝州能勢郡木代村切畑村西
村より貢とる。餅を割取らる

當家ハ餅く清め赤小豆と餅
米とよて餅とんきくの花をえて

あつたの花葉をかききりて色
 らす赤しこれ八家の子れ肉は
 表しうるこ下學集一曰承ハ毎
 年十二子を生む閏年ハ十三子を
 生む故ハ婦人これと祝ふといひ
 されハ童謡ふ支れ子ありらハ親ら
 子らめといふハ此故あるら十月亥の
 日ハ餅をくハ無病長生あり麴麴
 其外委しくハ歳時記拾遺ふ出り
 女の祝すけなむ甚面白し見るべし
 哥靖蛉日記「方代といふ山邊の
 いのこより君がつるよせいふ」
 排律ぬの面きふつくまは藤立南
 今おあけハ父燈の上のちおハ時風
 狂藤哈しあうまづれふきりりか
 さてもいこの服れをこく 貞松
 上今日槐の実を食四不成今日房事
 已まれば百病と去る日就日と慎し
 五 達磨忌 達磨南天竺の人ハ蘆の
 日 葉ふ衆てりるにじり

禪宗を弘む大和十九年十月五日
 寂以委しくハ博物叢ふ出り

排律唐ふ達磨思ふハ僧有寛人
 摩訶訶やあふふふふ中も道李破

狂小唐あぬのあふりけるあけぬも
 くらりからしてさび寺うな 貞柳

残菊宴 延喜の御代十月残菊
 の宴よりよはしたまう

哥秋さける菊よはあれと林を月
 附ぬよ花のさハうちける 貫之

連たれまのさる葉も菊のあけハ昌休
 排吾んて能くはるよハあ菊のあ嵐壺

狂秋をよこゆといふ事とてくくと
 ひりしそつた珍菊の宴 秀貞

十夜 此月吾より十五日まで淨土宗
 の諸寺よて會式を勤むとて

排は星袋の者ともふまゐる十夜ハ白羽
 いふふふ吉田の若田十ねも麥里

狂ふんくくもさなげと倉あき
 百万遍の詠の原をさし 松子

六 大興福寺法華會 一名山階寺
といふ九月

晦日より十月六日まで妙法の大會
とむくらしむ此大會八開院冬嗣公

初めより六日冬嗣公長岡大官此
御忌日ある也其為行のりや

十 讚金毘羅祭 讚州鴉足郡
糸頭山小神代

より御鎮座ある神々御神事八月
晦日より初より十月十日終る會參詣

別して多し故に季々々。金毘羅
道中記といふ本あり此本は金毘羅

參詣海陸の道中と委しく記は茶
御利生縁記哥等まで委しくのり

十 南都維摩會 南都興福寺
より十月迄行はる

哥 白川殿七首 新大納言顯輔
神皇月御友ふりおけるは法として

あはれ此邦にのこるる乃るそ
非 維摩をいぬりの杖のむし尾霜

十 芭蕉忌 俗姓松尾氏切の名
半七後赤忠基備門

宗房と改非詣と季吟小學は桃青
といふ江戸深川の庵は芭蕉一株を植

てり是ふよつて世の人芭蕉の公羽
とよがり尤非借中興の祖なり

三 御命講 法花會式
日蓮上人今日寂し故に

法花宗寺院におわく御影供と
後をみるさみえくあやうと云俗小御

の字をそてあめうといはるるなり
非 頭も花のさるる金成なる雨方

十 下元 今日を下元といふは七月
十五日中元の取なり

十 水官解厄 今日水官人間降て人の
善惡をまはし天帝を奉次

中 出雲大社神事 神あつちの神あり
出雲國葺葉村に

のり祭神大己貴尊の祭の當日
以前より毎年風烈く波あはき日

其日龍蛇藻葉に乗て海上を浮む
を取て曲物小盛了神殿に納む
り其蛇變蛇に似て錢形の變
あり尾先魚に似るものなり

十 都 聖 國 師 忌 東福寺に開山の
建仁二年十月

十五日生も弘安三年今日寂し

非 通 天 の 俗 と 夜 や 雨 山 忌 之 白

十八 此日雞初くとく時湯あり
とれんが長寿無病なり

廿 不成 ○今日遠方ゆく事と忌む
日就日 ○天龍寺佛國國師の忌日

廿 惠 須 講 誓 文 拂 此日商家
と終り酒宴を催して客をもまほく
中より呉服店に格別におもむく事
事之商人つねに欺賣の罪を拂ふ
とて誓文拂ともいふ京中て公官者社
は請て是と誓文かしの社に天坂
あはく公官の戎(衆)詣多し

非 夷 清 石 賣 に 荷 せ せ じ たり 芭 蕉
十月の廿日もうとを柱女うな巴桃
廿 〇 今日人の病とく事なり
廿 〇 南 禪 寺 の 一 山 忌 行 状 博 物 筈 に
廿 京 法 勝 寺 大 衆 會 〇 應 仁 の 頃 寺 絶
たり今本尊薬師佛兼坂下西教寺あり

廿 不成 梅尾寺明恵
就日 梅尾虫供養 上人の開基

晦 神 迎 〇 法 鏡 不 言 説 じ とも 鉢 堂 朝 堂
〇 洞 室 の 寸 拂 い あり 鉢 堂 暮 西

月 令 日ふくまらば十月一ヶ月の
雑事をしらす

御 取 越 十月廿八日親鸞上人御忌日也
正當日よハ本願寺にて報恩
講を修以一向宗の檀家小報恩講
を勤むハ當月取越て勤む故名づく

茶 の 場 〇 口 切 〇 三月小茶を摘五六
月以壺へ詰てあていへ

上し八九月に諸国へ出は十月ハ
茶人茶壺の口を開く故口切といふ

① 口切の場の庭ぞまのけき 芭蕉
 口切や後のひびく 綠苗維菊 其角
 ② 口切の葉とやめつぎ 後むし
 むしくのえぬし ちちくびらや 若室
 巨燧明 △巨燧切る。巨燧とはうら
いハ三冬よりのうら

時令 此部は十月の時候に
 けし事をあむむ

初冬 十月三五日までをいふ又十月
 の異名をもとらひ十月朔日
 一日此事をいふなり

哥夫木 隆源
 初きていよひが初夜いつのまに
 つくつく神のまわりのうら

類題 初冬歌 範宗
 ちやまより外山はをりうぐらん
 心木のうつろはるまじなるなり

家集 山家初冬 俊光
 おきぬこのまふとさそふ山風に
 去られがらなる庭がさびしき

① 詞をききふら。まきかかれぬ。これ
 初冬。阿ししききう。まきの来て
 きのわにまきる風。水。こほりて
 をまむくする。今朝よりふゆと
 きの上を林と。さよとふゆとや
 ちもまるとる。あまらるれぬ

初霜 委一く冬の土に記れ

② 冬をきてをばひもあぬ初霜の
 きてこれいふ風をよぐ 家衡

③ 初霜の葉をうり 重信 元宗 祇
 能 初霜や取ふ鱗の五より 支考

④ 初霜のまきあるもも 朝食の
 着をかく同の程中をひけり 立甫

時雨 △初霜のまきあるもも 朝食の
 着をかく同の程中をひけり 立甫

初附雨と十月はなりしはめて

ふるみりし秋のまよふる秋の
かれとて物しかれといえず。
霖雨とて小雨のまにてあてし
かれよをあてて

拾遺 晴まじし雨もあまふつ
かりいそやれがまひの森 貫之
千載 桐もあし七夜もあんなるあつた
木の葉にうづる秋も此雨也 馬内侍
夫木 神を月夜ささるる夜もあまふ
かしくや夕まれのそら 宗尊

碧玉 夜時雨
雨もあま雲はまよひをえへーとや
雨あまを夜の枕とあふん

雪玉 山時雨
あま山はしもをうそをたへく
雨あつきくは方はうまきま

同 霽中時雨
移りも去られてゆつそまの乃らと
くむ移のまうらうてやん

柏玉 河時雨

あつらるる雨も平剛せほま川
かきもやまに村しれうか

同 野時雨
そくくゆくせをきき村しれ
松もあつてあまのうら

古今 袖時雨 躬恒
神を月雨あふぬくとみらもあつ
まうらうし人のたれくもあつ

玉葉 松風時雨 憲實
あつられー山の木のまふりて
雨あまをのこまのまの風

同 泪時雨 公顯
あつみらまを杖のうらとふりあて
しれとあまの涙もあつら

詞 川時雨 袖時雨
あまの神あ
かきをりく 小夜時雨 後のしれく

村時雨 小夜時雨
あつらるる雨もあまふつ
あつらるる雨もあまふつ
△行時雨 一方はれて方 泪時雨 せしれ

△接時雨 風ふあきよま 夕雨

夕雨に △松風時雨 松風とこれの音

△落葉時雨 ちりちり葉の落る音

△志海記 時雨風の交るる委し

連時雨も思日あわしげなる宗砌

平に移はるあゆ世のしれか心敬

非 雨まれば時雨くきり用舟支考

初 雨れ猪も小義とほげくき蕉

志海記

時雨風の交るる委し 三冬に雪志海記の條あり

非 冬くみ傘指さしきまじりや 闇指

木枯

△雨と去る木枯りの風は清り 秋を吹風して木とくはか

分秋をふりあり俳まの季す

非 木枯のあけ竹散ふ修りか 芭蕉

哥 千載のあけ竹散ふ修りか 芭蕉

弟のまの風あひと長き 定頼女

液雨

唐閩中の俗立冬の後十日 液雨と入液とす液とくは清り

初雪

△初雪きりり△初雪の思慕 昔ハ初雪晴れは花下さらけ

△初雪ハ初雪ハ世外きのひまの初ま出

哥拾遺

景時

初雪きりりしとる初雪あ

初雪山ふりやまねん

瞻西上人

初雪きりりしとる初雪あ

初雪山ふりやまねん

初雪きりりしとる初雪あ

初雪山ふりやまねん

初雪きりりしとる初雪あ

初雪山ふりやまねん

初雪きりりしとる初雪あ

初雪山ふりやまねん

初雪きりりしとる初雪あ

初雪山ふりやまねん

初雪きりりしとる初雪あ

初雪山ふりやまねん

晩天 タマノハヤシニタノ木カハタカト
オモフホドオモヒカケテウキラク

スレバキウニ西風ニツレテハツ
ユキガフツテキタノレヤ

柳絮三冬先北地 ヤナギノワタカ冬
ノウチカラキタケ

梅花一夜遍南枝 ムシノハナ
カヒトヨサ

ノニニ三十三ノエダニサキロウタカト
オモハハツユキガフツタノデアツタ

初氷 初氷解 水のさけ要
冬十三日よる

哥 千載のいふも林にれし門乃
まにいとぬの水は清き人 公實

俳 行水の一夜とありや初氷 里隱
初氷と解はまの松乃風 韓悪

狂 ちみ竹屋ふとみらの二三枝
むまびとよるをむもむも 自史

冬され 冬されハ冬しあれどいふも
冬れ初まびりたあちにあは

冬籠 冬籠ハ冬に籠る意
冬籠ハ冬に籠る意

又一説も冬ふがれが家の内より
なることともしや之季ハ三冬ふしては

哥 雪ふれが雪よりける竹も木も
まよふとれぬ花不咲ぬ 買之

俳 金屋の松の古びやまふ花 芭蕉
西里ハ山城に方子ややらのり 支考

野水 野水ハ水也
野水ハ水也

冬構 冬構ハ冬に構ふ意
冬構ハ冬に構ふ意

俳 北風ハ北風也
北風ハ北風也

草木 草木ハ植物也
草木ハ植物也

此部十月の草木を集む
印するハ冬三月ハ草木不用して

名草枯 △葛うら △萩うら △薄うら

△花うら △女郎花うら △艸うら

御傘上花の字結△秋とどり

能女を呼ぶものありあり舞貴

文椿 △早咲椿椿の花は春と冬麻

残菊 九月咲のりうら菊うら

秋さける菊よあれと秋と月

狂 一とせの花のかぎりをゆき

ふ代の扱ふとゆりまきよ 舊徳

詩 殘菊詞 唐太宗

細葉周輕平團花飛碎黃

還將今歳色復結後年芳

細カキ葉カニホエナガラ五月キイロアリハナ

コトシハコシカナゴリナレドモ又来年コノイロカ

詩 殘菊五字對句 同上

闌珊陶令宅 晚彫霜凜冽

寂寞費公房 曉逐露離披

名牡丹 △寒牡丹十月ころ花さく

雪中牡丹 元政

狂 さむさうな形り小咲く

非 重ねる花をてをを牡丹一菊

犬莖花 ○石路を書く

狂 口なしのをを咲しをいりうりて

冬菊 △寒菊の多く花ハ重々葉

てりて赤を賞は 雪見柳

○秋無艸 同。霜見艸 傳。のこり 艸 藟

○初見艸 藏玉は出まふれは初見艸 説多し 寒艸の華ともなり

哥 夫木 式子内親王

白きうらたこらんゆらうらうら

蔵玉 初見艸

花咲またりをわやまららん

○連 雪をぬきぬきく谷の南なる宗碩

○非 雪にたまり天窓の上の菊の枝 嵐雪

後殿のつよもみすやその菊 梅公羽

○狂 ちちては紅きものまはりてふる

○詩 寒菊七字對句 詩礎

顔色却因風露染 愁雪葉

英華不畏雪霜欺 傲霜枝

ハナフサハユキヤシモノアテドル

ハナフサハユキヤシモノアテドル

ハナフサハユキヤシモノアテドル

ハナフサハユキヤシモノアテドル

水仙花 千葉あり單葉あり一重の
物花白く花心黄く

○非 水仙小あの日なほし陸子儀支考

○狂 竹えの云月心かくむえつゆ

○詩 水仙七字對句 詩礎

臺蓋元非千葉種 付雲來

○半 容要是小蓮花 不深埃

○手 花 葉の岐七ハあり形紅葉の

花白く小はくして黒實のるなり

○排 つくはひふふの花や水まぶり 荷風

○妙 おろりをふりて人此木の葉よ六

○薬 字の名號をうきつゆのふとく

○ちん じく 数杯飲へまむくし

○て 大とくく吐し忽ちおろりおつる

多く吞むとよしとん。実を食ふと毒あり

茶の花 白花之類 葉の硬し 支考

狂花の香ハまよふと云ふ山吹の如く

山茶花 南方草木状曰山茶花数種あり。寶珠茶

石榴茶。海榴茶 花の中ニ碎

躑躅茶。茉莉茶。宮粉茶

串珠茶 皆粉紅色とあり葉ハ各同じうらげと云ふ是ふよ門と

見せば今茶人々の賞に數種のつむきたぶし李寄ふあり

春の却れつむきといふハ海石榴之椿の字小充るハ誤なり

山茶花 花の硬し 竹尾鬼貫 山茶花の葉白く其角

狂つむきといふは山茶花の信面

歸花 狂花といふ 梅

櫻。山吹 花のり 此月三三

とあり尋常の花とハかしけり賞するに足らん

俳 幽 田井

歸花 雅櫻宮 履中 天皇三年

冬十月 天皇池

中に舟をうつりて白王に遊宴に膳臣酒と献る時櫻

花杯中に落けり天皇これをあやしむは是花時

物部長真膳連は勅ありて其花の来るを求めし免ふは

室山と得たり天皇其あつしきをよろこびて即宮の名と雅櫻と

名付たり是て花之日本紀にあり

寒梅 十月の季に入らる俳書も有
十月もは委しく十月は齋

枇杷の花 白き花よて八月より咲
はじめ十月頃盛よて

臘月までもある花の葉は四季とも
小散らす実ハ五月より花の頃より
実の熟ちるまでの間九月より
さる故自然とよく熟して味いよし

非 脱肛の廁に枇杷の花見ると鬼貫
ふるまるとは居せし枇杷の糸紹簾

狂 二月のすにいとをかりてどびこの必
はうとくと落るながらし 遊野

室の梅 △室咲室の温氣とら
未時花とさる

非 室とて面をさる花のよ李四
世来のよけ子のねや室の梅林兩

櫃の花 木を畑とて蚊や
とすのふかやとしく

油とさる物はいぬややめて食ふ
べうら小木よてよく実を結ぶ

非 いそめよ此室の櫃のよま甫
山より櫃の花をよ乃朝山川

散紅葉 △紅葉散。紅葉散し物と
染る冬くと御傘よ出さる

哥 古今此川よおをよば流るたぐ
山のちがけのおを今まらるし

千載那ふいもよまをよてんし
ども紅葉ちよしく必川の度 頼政

連 神を月ちるひのころ紅葉は肖柏
ありちる紅葉ふけのうら 宗碩

非 戸を叩くもふ言ありたぬ紅葉路外
吹の音せめて二枚をよぬ紅葉曲巴

狂 ふしきをばちりく屋の上かこを
めまてあくくとうらよばたれ貞柳

麥 漢土ハ秋種と下せくも
本邦十月ふ下して四月

黄熟ハ是亦早中晩の異有。
日本後紀稱徳帝大臣吉備小勃

ありて天下の百姓ハ大小の麥を
種しむといども其時とらしむ

遂不成其後嗟我帝弘仁十一年冬嗣公に勅ありて今より八月

小蒔しと是より時と不味といひ

非 寒葦やあさみ自さう一人の朔平

枯蘆 詩よ、寒葦といふ

西行

浦の玉の孤波はまはまなれや

あししの枯草よと風やうら

あふくたりふたりしな孤波はの

あさばまうらぬ草の枯成通

孤波はけの草はあがれてあふ

枯草あはれふたり 二條院讀

詞 草の下なる草。風をくもる草

非 ひあれどむと人長陽の草鬼貫

秘 おわや草をれらうはつみ支考

狂 草も本もさうよまきさの

狂 草も本もさうよまきさの

狂 草も本もさうよまきさの

狂 草も本もさうよまきさの

狂 草も本もさうよまきさの

狂 草も本もさうよまきさの

狂 草も本もさうよまきさの

狂 草も本もさうよまきさの

狂 草も本もさうよまきさの

狂 草も本もさうよまきさの

狂 草も本もさうよまきさの

狂 草も本もさうよまきさの

狂 草も本もさうよまきさの

狂 草も本もさうよまきさの

狂 草も本もさうよまきさの

狂 草も本もさうよまきさの

狂 草も本もさうよまきさの

狂 草も本もさうよまきさの

狂 草も本もさうよまきさの

狂 草も本もさうよまきさの

狂 草も本もさうよまきさの

連 神皇正統記の巻末なる落葉の春智温
ぞくまねばくそあなはる落葉の宗廟

俳 一葉ちりいづるちりて月夜は嵐雲
かしら木の本ふし割る角も井桃戸

狂 西風のさむい雨は極休をこま
のけ落葉ふと見ゆる天正寺徳輝

木の葉 △木葉舟 △木葉衣 △木の葉
つげ中うみて木よあも葉とも

いづれれれ和哥などふといふ事へ俳の春ふ
出ぬのいづり落くる木を葉といふは

木葉衣 △木の葉を衣よきといふ
又仙人など木の葉を衣としる故事あり

木葉舟 △舟と一葉といへば立秋の條
に一葉舟の故事あり考合は

木葉の雨 △木葉時雨。雨のふる
ごとく木の葉のちりといふ

詩 風吹枯木晴天雨 白氏文集
風が枯木ヲ吹ケ晴タル空カ雨ノルヤウナ

連 ちりてしるも耐風の木葉の如 宗祇
寄とある云ふは木葉う都 芳室

狂 人ちりて木の葉をさるるをさるると
喚ぶ月夜のりりりりり 貞左

朽葉 木の葉の地上は落るとち
れりちりてふまご枝よ青

なごる葉のちりちりをもいふ
哥 夫木朽まれぬ朽葉あは下に
まりて紅葉ふ吹ゆる庭の本はと 左相

俳 散もせて危なきもき朽葉は 矩州
ちりる者もたうて朽葉の口惜や

口惜やとて沙のまもあり 舊徳
又 蕪 蕪のあつらふも 鬼貫

狂 ちりちりちりちりちりちりちり
ちりちりちりちりちりちりちり

大根 △大根引 △大根餅 △大根似て根
大之故大根といふ 羅 蘿蔔

俳 子乙女が書とるなり大根川 野坡
手は雨はまのり 腕のおはゆい 宗離

冬木の櫻 △冬咲くはくさう
冬咲くはくさう

冬木の櫻 △冬咲くはくさう
冬咲くはくさう

冬木の櫻 △冬咲くはくさう
冬咲くはくさう

冬木の櫻 △冬咲くはくさう
冬咲くはくさう

雪の下 花月、鴨、野、高物、三、葉、冬、盛、雪、の、名、小、よ、て、奉、る、

終の花 園、こ、き、八、い、ら、も、き、秘、蔵、出、いら、と、葉、に、刺、有、故、り、

生類 此部、十月、十一月、の、生類、を、あ、め、出、し、

鶯子啼 鶯、人、の、子、れ、ら、く、好、ま、く、ま、い、る、湖、中、

狂 狂、も、ハ、さ、す、が、花、の、か、い、じ、を、子、も、よ、ま、り、ふ、ま、り、し、い、な、井、魚、

必用 此部、十月、十一月、の、天、氣、の、見、や、真、外、必、用、の、事、を、の、

| 破 | 夜九ツ 巳ノ方 | 夜八ツ 寅ノ方 | 夜七ツ 卯ノ方 |
|---|------------|------------|------------|
| 軍 | 朝六ツ 辰ノ方 | 朝五ツ 巳ノ方 | 昼四ツ 午ノ方 |
| 向 | 昼九ツ 未ノ方 | 昼八ツ 申ノ方 | 昼七ツ 酉ノ方 |
| 方 | 暮六ツ 戌ノ方 | 夜五ツ 亥ノ方 | 夜四ツ 子ノ方 |

日刻 戌の、日、戌の、刻、亥の、日、亥の、刻、事、を、さ、す、用、ゆ、る、事、な、く、ま、

出行作事 東方、小、向、ひ、て、す、一、天、道、東、よ、行、月、に、

樂事 小、春、の、長、閑、る、る、に、面、を、北、よ、り、て、烘、く、る、日、光、に、

脊、を、く、り、し、て、暖、和、を、得、る、ハ、か、の、負、暈、黄、綿、襖、子、昔、の、詞、む、む、に、

瓶、よ、酒、を、あ、く、り、獨、酌、あ、る、ハ、ハ、對、客、炉、邊、の、ま、ま、な、風、寒、を、ま、の、

ぎ、て、春、和、も、お、と、す、又、枯、枝、ふ、り、咲、花、の、け、き、ぶ、づ、り、う、ま、り、

天氣 今、月、末、よ、り、の、西、風、半、日、も、づ、き、て、大、ま、け、ふ、ち、る、物、を、

西北の、風、ハ、日、和、を、つ、ら、さ、と、な、紫、乃、雲、を、て、大、風、を、成、亥、の、日、雲、あ、れ、ハ、風、

生、び、電、あ、れ、ハ、大、風、あ、る、今、月、八、兩、後、よ、風、吹、く、と、東南、の、風、ハ、久、く、は、

占候 虹、あ、れ、ハ、不、作、り、て、五、穀、實、し、初、の、ま、の、ね、に、ま、り、れ、ハ、

その、冬、大、小、寒、ば、の、十、九、日、晴、る、れ、ハ、冬、大、よ、あ、さ、り、う、ま、り、申、の、日、寒、を、

うらぐれ 暴死多し。東の雲
たてば けしきあり

養生 此月 暖帽といく事
なれ 脚を冷すべし 眩

暈の病 ありみ 針灸と
くづ 血凝りて 津液め 座

昨 西方より 一しかる ば 房事
を 一む事と ころふら べ

衣服式 当月より 綿入と 暑くべし
移菊 表紫 裏青 黄紅葉 表黄

生花式 残菊。茶花。寒葵
。隈笹。霜より 五葉

。寒竹。かま松。唐松。大山極
。つハの花。ゆつり葉

。此月 紅柿の仕中。梨みり
なく 香りの物漬中 秘傳

どく。梔子。木芙蓉。中種
蒔の品く 其外 当月用意の品

并 小養生の仕中 等委し 日本
歳時記 知術全書等 小出故略

十月 部終

十月飲食並料理献立

禁 山椒と多く 食へ 血脈と
物 破る。ふらぬ 食へ 涕多

く 出る。霜ふ 枯る 菜と 食
へ 面の いろぬ 損と あり

好 今月 芋と 食して 益あり
物。○ 雀肉 冬三月 これと 食

へ 陽道と ねこし 人として
ふあし びらきり

料理 汁。あじう 瓜 かせ
あじう け せう

とら 小花 及び
つよ 本 け

あい子 やるた 及び
きく せう

清汁 きんこ かい
漬 年 け

膾 朝。せん 及び
大 せん 及び

大 せん 及び
きんこ

ふたみ 細つら
うど けつら酒
本々 けつら酒
白う けつら酒
あし けつら酒
梅 けつら酒

さし 味
かた 朝
たぐ 不
ま けつら酒

あび 味
本々 味
かた 味
あし 味
梅 味

あび 味
本々 味
かた 味
あし 味
梅 味

あび 味
本々 味
かた 味
あし 味
梅 味

あび 味
本々 味
かた 味
あし 味
梅 味

あび 味
本々 味
かた 味
あし 味
梅 味

あび 味
本々 味
かた 味
あし 味
梅 味

あび 味
本々 味
かた 味
あし 味
梅 味

あび 味
本々 味
かた 味
あし 味
梅 味

あび 味
本々 味
かた 味
あし 味
梅 味

あび 味
本々 味
かた 味
あし 味
梅 味

あび 味
本々 味
かた 味
あし 味
梅 味

あび 味
本々 味
かた 味
あし 味
梅 味

あび 味
本々 味
かた 味
あし 味
梅 味

あび 味
本々 味
かた 味
あし 味
梅 味

あび 味
本々 味
かた 味
あし 味
梅 味

あび 味
本々 味
かた 味
あし 味
梅 味

あび 味
本々 味
かた 味
あし 味
梅 味

あび 味
本々 味
かた 味
あし 味
梅 味

あび 味
本々 味
かた 味
あし 味
梅 味

あび 味
本々 味
かた 味
あし 味
梅 味

今んききくま

たすい

差味

ちり栗

煮物

ほふ

和會物

まな

吸物

あつたけ

時魚

うのえ

青物

あじ

きんかん・じまび・牛房・めうど
あつたけ・ゆ・どくろ
防風・アウマウイ
びんさん・ぎあんがう

十月之部目錄

十月

卦月支 謝子 陰陽生
元三計 十月異名元三計

大雪

三冬至

冬至賀

三陽嘉節

冬至 獻履襪
履長賀 履奉る

赤小豆粥食ふ

日令

朔 朔旦冬至

日曆葵

朔 相嘗祭

上 筑前宗像祭

上 吹革祭

三十 空也忌

三十 鉢叩

三十 京 新津鳥

西 平川祭

○春日祭 ○大原野祭 ○園や神祭
○杜本祭 ○當麻祭 ○當宗祭 ○日吉祭

○吉田祭 ○山科祭 ○平野祭
○梅宮祭 ○中山祭 ○松尾祭

中 五節帳臺試
帳臺の試

中 殿上淵醉 寺

中 鎮魂祭 寺

中 童女御覽 寺

中 日陰髪曼 寺

中 小忌衣 寺

中 伊三島大明神祭 寺

中 子祭 寺

中 近江日臨時祭 寺

中 掛鳥 寺

中 後日能 寺

中 都宇賀祭 寺

中 御火焼 寺

中 庭燎 寺

中 狩使 寺

中 新嘗會 寺

中 豊明節會 寺

中 大師講 寺

中 南都御祭 寺

中 親鸞上忌 寺

中 都加茂臨時祭 寺

中 神樂哥 寺

中 神樂 寺

中 採物歌 寺

中 阿知女 寺

中 大前張 寺

中 井奈野 寺

中 山神祭 寺

中 髮置 寺

中 顔見世足揃 寺

中 歌舞妓顔見世 寺

中 綱貫 寺

中 標 寺

中 雪半 寺

中 時令 寺

中 雪吹 寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

寺

△はれ雪 雪 草

△雪まふれ 雪 草

△もち雪 雪 草

△雪佛 雪 草

△深雪 雪 草

△雪やけ 雪 草

△氷柱 氷 草

△雪 雪 草

△艸木 草 草

△太山櫓 櫓 草

△生類 生 草

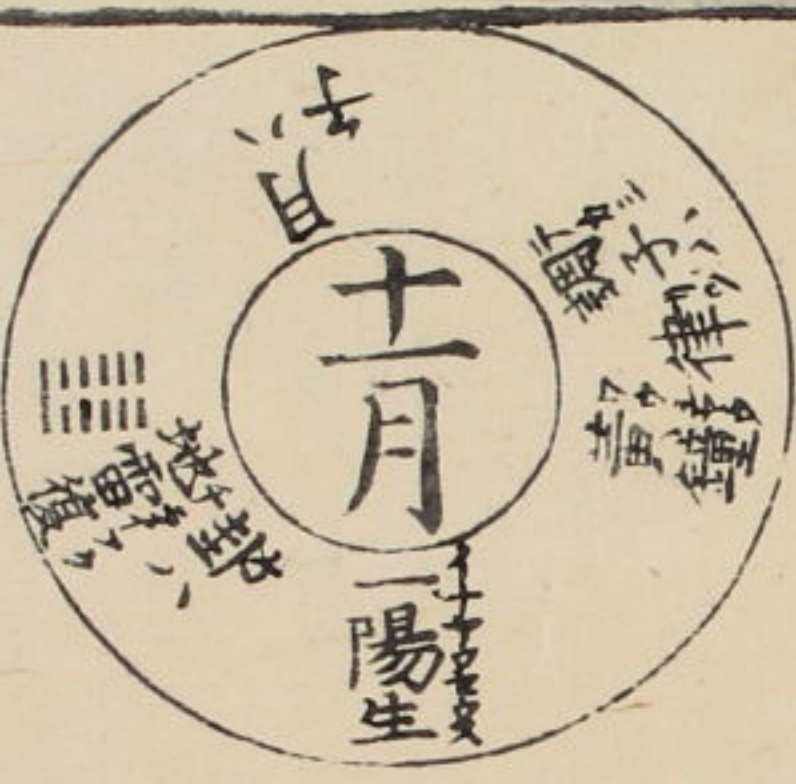
△杜父魚 魚 草

△飲食 食 草

△干くさくさ 草 草

十月之部

△印ハ俳諧の季
を多門物ナリ



十月ハ六陰
生じく陰き
ハるる當月
中冬至より
一陽來復は
なり

○調子ハ黄鐘とハ子の律といふ
と月令の注より

○卦ハ地雷復ハ月令ハ雷をなるとし
發有て陰氣ハ陽氣をかくむる事
何とざる故ハ声を發るのむらさ

十月 異名 △仲冬。周正△復月△一陽
○天正月。暢月。享月△冬半

和 △雪見月 △子の月 △かから月
名 △霜降月 △霜月。かきき月

△雪路より月。雪まら月

異註 △仲冬ハ禮記不出文のりかるといふ
事△周正ハ基本日周の世の

正月は阿る月と有△復月ハ漢書一陽来復する月なりといふ天正月

も周の正月と同一義なりハ暢月ハ禮記の註陽文一屈して後ハ暢月ハ陽月といふなり△幸

月ハ月名註又幸を克なりと有て萬物よく克るといふ義なり△陽

と一陽来復する月也ハ名づくハ

○秘藏 秘蔵する月

つゆはつとつきの夜を秘蔵は

莫傳 ぎき月

月もはたかす林路の林路月

あまはつのみ今やあくらん

同 雪あらし月

山風をさすは月といふあま

とハ志されてあくらんりハ

蔵玉 からる月

馬もすきくものえはの神出月

たつさるこれ考のちやき

同 雪見月

くもりつるそのちりハ雪見月

今朝こそをのちりハ雪見月

○非 雪見月の月ハ雪をつきませハ 湖春

狂 雪見月とききともふと雪見月

ゆきももろりにちる月ハ 野遊

大雪 節の名。七十二候。艸木七十二候

昼夜長短。日の出入等左に記し



○鷓且ハ雉ニ似て色黄黑夜鳴て且と求る鳥なれハ求且鳥ともいふ

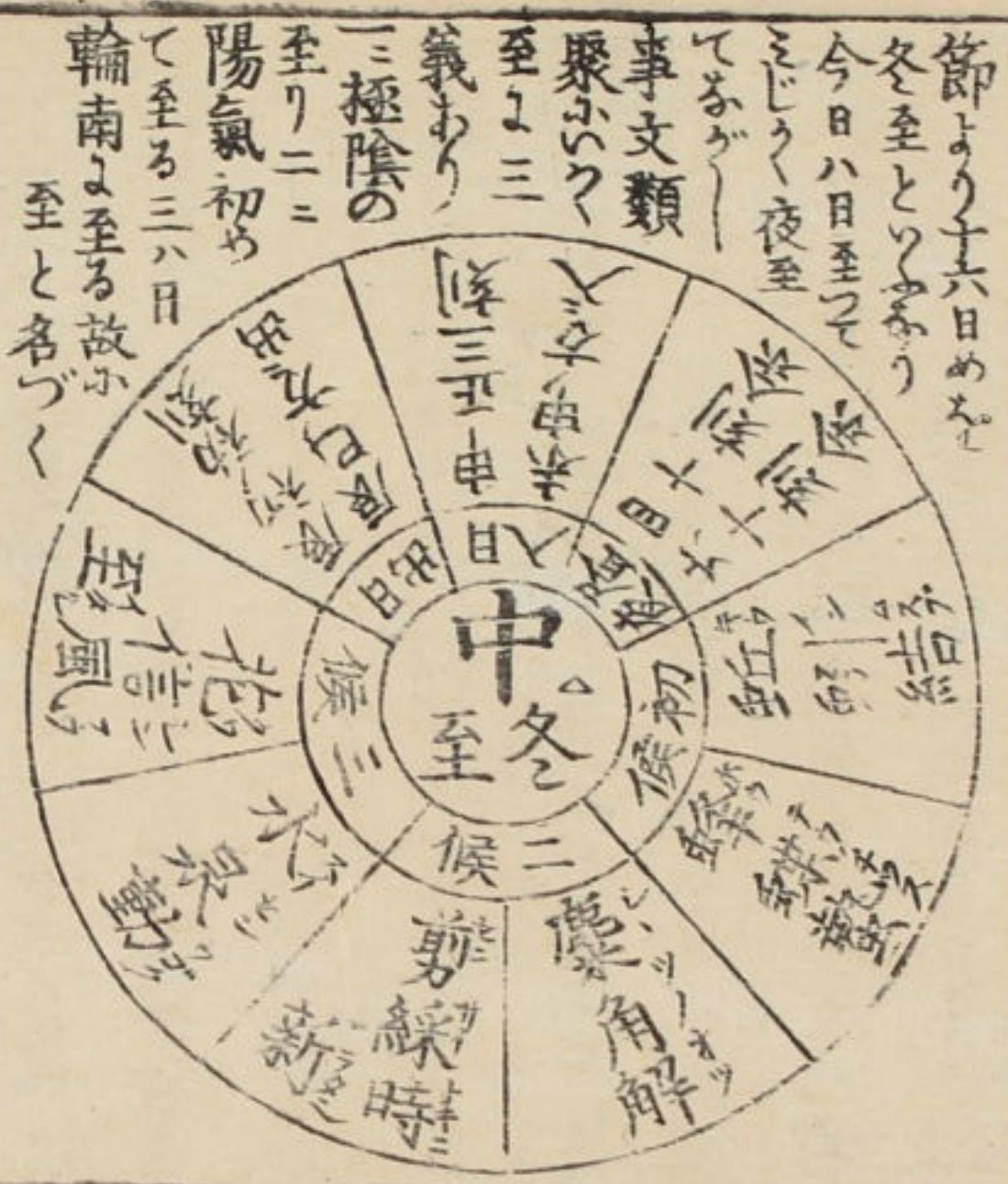
○雀一花の事本草ふも見えす

いせつまびらうなうハ○虎始交ハ

禮記の注は 虎ハ陰物なる也(陽の生
 するを感して交をいふ) ○枇杷蓋
 ちりちり枇杷の花さの出る ○菘枝出
 とハ潤をさるるの陽氣くるふのひ
 出る ○松柏秀といふ木せぬ松柏これ
 とも陽氣ふりよふされていゆく秀る也
 節の養生 今月補藥を吞むべし
 尤大熱の藥を服に
 するつらげ又東南賊邪の風とつ
 ぶむべし是を犯せば病を生ず

冬至

中の名ニ七十二候。卯未七十二候。
 昼夜長短。日の出入等尤ふ記に



○蚯蚓結、禮記の注は 蚯蚓ハ正陽の氣に
 感して後ふ出るもの也今少しの陽氣生ず
 るに蚯蚓(あつち)してのひぬかちと
 云之○蜂蝶蟹蝶も蜂もいづと出る也
 ○麋角解一陽殺るふ逢て麋の角さ
 りと落る○剪綵時新をじ日水みれる
 也(婦人の多業も線などあるやふなるも剪
 綵の新さも出来る)剪綵はきれ細工の事(水
 泉動陽下ふ生る故氷たる水も泉もさき初る)
 ○花信風至諸の花を催し風を吹至る
 冬至賀 聖武天皇神龜二年十一
 月天皇大安殿ふ出御有
 て冬至の賀辞を受ふ云 續日本紀
 朔且冬至の事ハ朔日の條あり
 冬至の日ハ一陽未復す故ハ一陽嘉節
 とす。唐ふれ今日ハ在京の宦人朝服を
 着し泰内拜賀と上ハ王候より下
 民間ふける也酒宴を設く祝ふる
 哥一とらふ君よりひのふ代とらく
 いと長き日のかきうはうん 為真

俳老 匠老 浄る 安 冬 至 ち 順川
下 冬 至 ち 浄る 安 冬 至 ち 順川

詩 冬至 五字 對句

同上

夜向三更靜

一陽方動處

ヨハ 夜 十カニ 近ウシ
テモノニツカナリ

一陽ノ氣ガソロクウ
コクトコロニ

愁添一線長

萬物始生時

ウレハッテハシラセラト
物オモニハススホトガ
ウナツタ日ニヨクマサレ

ヨロツノ物カハジメテ
キガストキジヤ

詩 冬至 七字 對句

詩 礎

岸容待鴈將舒柳

鐘初動

カニヨリ 岸容ニツカナリ
チケニキハソクニカハル柳ジヤ

カ子ノオトモ初
メテウナリ

山意衝寒欲放梅

日正融

山ノヤウスガ寒キ氣ヲソラソラツキ
タルヤウハ八開カウト奈梅ガアルユヘヤ

日カガモタイ
ニドカニウツタ

詩 冬至 詞

方巨山

至日觀書不幾行梅梢橫月

欲黃昏

至二月カケラヨコタヘテソカレニナラフト
スルハマタ日ノミジカイユヘジヤ

至日ノ書目エツラニルイ
ククダリイモナイノニハヤ梅ノコス

漢宮紅影無人見未必曾添

一線長

冬至 故事 獻履禮

唐土の婦人冬至の日履を襪と

姑ふくまてまつる是長至と踐の義之

魏の曹植も冬至は履を献する

表は曰冬至は履を献するは長き

を履するまへに賀する事あるはし

淵鑑類載に見えん

律管灰飛

冬至の日室中に慢をば

多て律管が段の灰をこめおくり

赤小豆粥

赤小豆粥を食して

疫鬼とわらふ平生赤小豆を畏

ふれば今日赤小豆粥を食して

あまは派はくくつてつちりり煎楚
歳時記に出く

冬 **神農祭** 唐土の炎帝と
号は百草をたみ

て薬を初めたり医道の祖神
故今日医師祭とせむる

此月田の神を祭る事 兵神農の
事委しく日本歳時記に出く

冬 **天氣** 冬至よまはく降出
たる雨ハ晴おそく雲

くらくかり少く風をそく星乃
らくらくと見える雨のあがる

冬 **占候** 冬至よ比の方よ青き雲
われハ来年ハ大よき雲

かきいありありき氣あれば
くく黒きは水く白きを疫病

くゆる黄なるハ火災あり但し
五穀田畑よハよりの天晴まで暖

なれば来年麥よし 冬至の後日
よ土の日あまハひびりあり二日よ

壬の日われハ早くもし四日ハわれ
を豊年ニ六日よあまハ大水ハわれ

ハ海ひるあまハ九日われハ麥作よ
し十日よわれハ五穀よしといふ

冬 **養生** 冬至よハ陽生して日々
に陽氣生じむる時われハ

内よ安く坐してみたり 他行も
のつて今日房事を慎むハ冬至前

後婚禮とベクは尚又。養生。詩。
故事。妙術委しく日本歳時記出

日 **日令** 此部ハ十月日決定する事
并又支の定する事を出り

朔ハ日世俗小豆飯を喰ふこと
日阿かかハハハハハハハハハハ

今日冬至よ當る時ハ上下とも祝ふ也
たと冬至よあまハハハハハハハハ

飯又ハ小豆餅を喰ふて祝ふる也
且ハ唐の共工氏ノ故事ハ准る事ハ共工

氏ノ事ハ四丁ハ赤小豆粥の処ハあり
○今日枸杞あま湯あますハ不老

朔旦至

今日冬至小當る事をいふたましく朔旦冬至

より終時八日出度祥瑞なるより天子南殿に出御り節

會行々群臣賀表を奉るるや

奏しく、天子俗談に「冬至出御」云々の事あり

朔曆奏

今日明年の曆を天子へ奉るをいふ主上南殿

出御ありて是を御覽あり曆乃

てしまる、欽明天皇十四年百餘の

博士が奉るるや江波等日本紀等に出

非曆奏也老の獻をいふ、半窓

五大、住吉新嘗祭。今年の新米を

日阪神に奉る事今日日阪神に奉る事あり

二京、永觀律師忌、東山禪林寺永

日都觀堂の開基、天永二年今日寂し

相嘗祭

相嘗といふ、神を相嘗相嘗といふ、神を相嘗と云ふことあり

と云きく、アイムへと讀む。今日天皇

正禰殿に御幸なりて勅ありて

三輪。住吉。熊野。熱田。廣田。生駒。降鉞。大和。津島の大社を祭る

其國の国司に命じて其國の官倉の初米を供むる先代田事記に

○延喜式に曰相嘗祭の神七十坐有とあり。近頃絶つると公事根元出

上筑前宗像祭

筑前国宗像郡祭神三座延喜式出

○神體、素盞鳥のうさひし三女之田心姫。湍津姫。市杵島姫日本紀に出

○一説、大和山城にも宗像の社ありといふ事も同躰の社あり

八吹革祭

吹革といふ、礮籥とも書。鍛工籥籥を祭る事三條小鍛

治より始る。昔後鳥羽院太刀カをうせむ事好ませむひて時の

名工ともを禁裏へめされ十二月おわちて其月々れ番かぢをさくをんを

かゝる其時、まゝ山のとを取らるる用ひたる故彼鍛冶とも度々性来

していさる山の神を拜せしより
ついにいさるを祭る事とあれ

○北枝 北枝 北枝

○西陽 西陽 西陽

○船史 船史 船史

○狂 狂 狂

○九京 九京 九京

○日都 日都 日都

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

○今日 今日 今日

とて即經賢法印と別當と後世ハ季吟又其男代々守るといふ

○三津八幡宮御火燒

○天王寺佛名會音樂有リ

上平川祭 平川社奈良の子守町有開化天皇此地

○四月九日崩ト御陵より祭神開化天皇。子守神。住言の神と三坐之季守寄

の書ハ此祭年ハ兩度有とちして祭ハ此月より出ル。按ハ此祭四月ハ行ふと三

枝祭とつ此月の祭と平川とつるは

○此祭ハ春日祭のあつる日行る神祇令ふのちる三枝祭と同一なるを盛くハ

四月よりあるべしと公事根元よし

又三枝祭ハ平川をまつと神祇令ふ出三枝とつるは

○顯昭の説ハ三枝とハかかと扇とつ未廣々ハ祝ふとつ尚ア四十二(ハ)春日祭 大原野祭 西園韓神祭

中 日吉祭 近江の国日吉山王祭より四月嚴重の祭礼あり

四 杜木祭 當麻祭 當宗祭

中 吉田祭 山科祭 平野祭

上 梅宮祭 中山祭 松尾祭

右の祭ハ當月と四月と兩度あり能ハハ初めを用ゆるゆへ四月ハ冬の景物しとて此月より一季吟翁も句辭ふよつて季を定むといへ

○大阪の人宮の社御火燒

○諸国ハ幡御火燒有

中 五節帳臺試 五節の舞帳臺の試

舞姫五人なりはりの儀式あり天子帳臺より出御ありて御直衣

御指貫みく御書をもつる清見原天皇の制一玉ひし事と

いり天皇吉野宮ハ琴を彈きさういし時ひくしの山と雲いと神女

天降つて天皇の曲み應して五
度袖をかへして舞ふるよんく

五節と名づく。清見原天皇御
宇又唐土より昆崙山の玉と五

まつせ玉へと其玉闇とてす
事一の玉の光り遠く五十両の車

小至る是を豊の明とつて天宮は
の川にぬきして御心をなまし琴を

彈きひし神々空より下と圓雪の
袖をひきかへしをれも天からして

さうけきひの玉を出して仙女の
ちを御覽じたると云く源平盛衰記出

此説信じがたれども哥小うく玉
と讀くことより所阿る小似たり

哥 おとめもあまをひきかへし玉を
たりにてゆきくたをみさひさせ

古今天は風雲はかきいら吹らちよ
乙女のまごころをけしとて人 宗貞

續後撰 同さあをこれのまごころ
おとめの袖もひりきへい 実雄

中 殿上淵醉 此日五節とて公卿
朗詠今中うちより

たひらひ其後乱舞らう次第ふ
杳然をきく北の陣をみり五節所

よつり又取々小推泰とるとて哥を
うへひらふ事と此事正月三日かも者

神醉 いふく酒と酔といふ事へ
北山抄に

非 肩脱の袖ふ物走くやな上人 奔吟

中 狩使 今日五節所と給ひる
雉子を交野へ狩まに

遣 いさる使をいさ
る

哥 冬日さるごよのらうけみうきと
かたけく丘野をさよもくしつ 俊頼

非 乃の泥ふ糸をまじし狩使 嵐雪

狂 貧乏の持れつくりハ節 香かへ
とくかあまのまひるのく 信海

中 鎮魂祭 人の魂魄のくくると
ゆきまきとを身れ中ハ
元年十月宇麻志麻治命瑞寶を

ついで帝后の御祭らる是はじ
り此神八座宮内省よあらしし
秀吉公の時吉田山よ遣り奉る

能 堀を几中よあつたおふ天川

中 卯 新嘗會 △新嘗祭ともいふ
○其年の新穀の初

穂を神小奉らせり天子御代初
め小行りたるを本嘗會といひ年毎小行

るを新嘗會といふ用明香王二年四
月より此事始る神代卷より天照太神嘗新

嘗し見へれば是ハ神代より有幸ふや

能 打ひく琴の音し新嘗會 白羽

哥 禪林五百首 髪はは林のすもも
らとてかたむすむむむむハ 御製

中 卯 童女御覽 清涼殿小童女と
召して天子御覽す

る之長ハ五節の舞小つぎくる事ハ

能 ころハの何をは後を問ふハ 月淡

中 辰 豊明節會 前日神小供したる
新穀を天子御覽す

臣下あもろ故節會行らる

能 治癒は其のゆれ吉屋か 李坡

哥 ころしあむ此日軽かすのなる
そのゆそむく感一死 為家

日陰髪 △日かげの糸ハ心葉ハ日
かげのころころ又次の小

忌衣ハ大嘗會豊明は用ひくく
りのせりの日かげの髪ハ薙まろ女

薙まろ下り苔とり俗は爪のてを
とりし州を符は舞るなり又日陰

の州をとりて舞るなりいへも日かげ
ハ此髪を舞く日の表はれまがき

を薙つ料あり日かげの糸ハ近代
髪はかりに白糸青糸を組て舞

るハ心葉ハ冠の巾子造花をつ
くまかり今ハ金紙まろ白紙より

心葉は料とちりあり

哥 續古今万々ふりそのゆれ見か
州いつのせよりあけけしあそん

能 霜月や公家も目後ハ糸も流ハ其角

小忌木 山藍神 小忌神。是豊
がれを忌と云心く今日神樂の役出當と
小忌の殿スといふ。小忌衣の色は白き布を
春州又小鳥をいふ山藍をてまつける

○哥 ころもきまのぬれさくころも
日かけさみくまのく人 倭成女
○非 雲のくすれおと小忌衣 宗因

中伊 三嶋大明神祭 △酉の市。
酉豆 祭神大山祇

命祭禮の日諸国より商人来りて
諸の物を賣ふ是を三島酉の市
といひて季々あり。能因法師西の
哥當社へ奉りといひ一草あり

○哥 天の川苗代ありせきくくせ
あまよりもろの神あり八村 能因

○非 ぬき持あつる酒の市 來永

甲 子祭 △甲子祭 △子燈心。當月
子 子の月故子の日大黒と

多き世俗は大黒ハ鼠をとりや

まろとつり二股大根黒米黒豆
なとを供へ子の日祭をなほし月
毎甲子小ハ祭る此月ハ子ハ月故
甲子小何とてはとも初の子の日を祭

○此月子に日燈心を貯りれば大福
あり子祭子燈心の事委く 歲時記
論あり面白き事に見よべし 祭禮記

○非 子祭りや天恩小白大根 鬼貫

○狂 浪よきけハ果報ハ子院を大
まろぬいのくもみ 貞柳

十大 道陸神祭 俗に泥く
日阪 祭アといふわり

天王寺村合法辻の辺ふ小さき石
佛あり此石佛の顔ふ米のこさぬり

供物を供へ笹は蜜柑と噺して
踊る是を道陸神祭といふ此祭

の三日前より村中れ童出て往
來の人は供物料をふあふされハ

繩又泥をぬりて人を巻くむ

○非 道陸神の中ふせき草 玉芝

狂きくも々れ多かりと見へて乃陸禰
才流

十 諸国神明宮御火焼
六 大阪座戸宮御火焼

申 近江日吉臨時祭 此祭は建曆
三年十月十八日

勅使を立くま臨時ふ祭禮行ハ
れるより初る今八中の申は日

十 京御霊の 廿 雲居寺淨
日 都御火焼 日 蔵の忌日あり

光 今日遠方へ行く事なれ病人ハ
見舞事なれ子の年あり慎む

北 大師講 唐の智者大師今日
寂に依て天公の諸寺北日より今

日 まで大師講と修行と比叡山日光
山等ハ廿日あり廿三日朝まで昼夜法門

有是を論義といふ民間ハ今日小豆粥
椀と折箸と及是を智恵粥といふ

非 智恵粥や何の字も争はば 乙由

北 南 春日若宮宵祭又御祭宵催
日 都ともいふ今日奥福寺の僧頭屋

田樂は長谷川黨神前ハ泰旨
て野太刀と携へ馬と牽是を遍照

院の度といふ今夜亥の刻過若宮神
明の燈火をけし闇中小神體を御

旅所へ遷し其後火を上げ音楽等有
非 祭きしてアヤを刀遊 如来

掛鳥 鳥を懸てをいふ
鳥獸を懸てをいふ

雉羽免狸等なり廿日より廿五日
はく春日の神宮此獸を改む是

を獸改めといふ

非 樹を鳥部家不獲所の骨を夜 静夜

北 南 春日御祭ともいふ
日 都御祭 春日若宮の祭あり

若宮の御傍所ハ春日の安宮と
といふ常ハ官もなく芝原あり

今日の御祭よりいふ御殿を
營み若宮を渡御を奉る毎

年八月十日に此なり御殿の村
木は大和國中より所をくく
例式ふよりく木を伐出し春日
へ奉る九月朔日御繩棟の式例
あり當月廿日ハ神殿の造營
あり廿六日の夜御旅所へ神幸な
り嚴重の儀式より轡白殿下
より駿馬の伶人等つららふ
これ廿日使こい御祭崇徳院
の御宇に始るしや

後村上院御製

きんくたやまをさしきりし春日ゆふ
をくもお月も神をささぐちり

後日能 今日春日能なり祭
禮の後故よるづく

親鸞上人 報恩講高宗
の宗祖親鸞上人

弘長二年十月廿八日小寂以壽
九十歳より故よ廿二日より今日迄

報恩講を修行以俗御霜月と云
俳句も清ぬかからるるは月秀頗

京都宇賀祭 京九條に有此所の
東西のほど宇賀

のけといふ倉稻魂神訣ハ博物堂
俳句めてをいひま附の宇賀祭 山友

下京加茂臨時祭 北祭ともいふ
北祭に寛平元

年十月より初る。かごと花取
とりて次身にこれを献じて使符
にけいもむ式あり清涼殿小出
御ありて行ける江流弟小出

哥 夫木 季經

津山のみくし川はわらへく
大いふ人のかさねふらふ

能 冠をさしれたるうらみ 瓢山

月令 此部み日れささきまらさ
十月一ヶ月の事をしる

御火焼 此月所々の神社で火を
焼湯を奉る是ハ神樂

十月一日

庭燎の余風をるべし夫く社まで
行つて日遠へりゆまはし前くの日の

取は記に。此月御火焼とるに地中
ある陽氣を追出以訣職時記拾遺ふら

神樂 △東三條御神樂 △山神樂
△里神樂。昔天照太神

岩戸ふころくせうひ一故世界々々
やまとうりし時諸社岩戸の前ふ

あつまり庭火をたれ并新しあひる
事有神代表ふ出今神樂を行つた

其余風をり故に行ふところ此物
皆神代卷よるくへ△東三條

の御神樂下の卯の日といふ昔ハ
東三條重明親王の御宅あり其

辺△西社の神有仁平三年十
月下卯の日神樂派奉らせとる

事拾林抄其外諸社山今ハ絶く
△山神樂といふ禁中内侍取あて

行つたといふ△里神樂といふ禁
裏の外神社をく行つたといふ

拾遺 触宣

あつたけれとらとらとらとらとら
ひふけもそいへ出ぬとけりは

新古今 貫之

かき帯ハ人のこせとらとらとら
聖王 詠月前神樂

つらなる早れひりも天の戸乃
明く月かけをあらへ

連はきはる代の夢とて山 宗碩
うふおほおほをきききき

汲ほる夢いよもしきよ津朱 紹巴
非お練生や侍士のく火のよき

野水 狂人の面ふくを月のあうらふ
さえさるる中もすそたけら

為國 哥天木 里神樂 入道前関白
山りやいつくも志しぬ里神樂

こゑもるる暮いふ内あふ

能 係 此 松 子 也 阿 久 也 里 律 宗 白 羽

狂 か ら し 火 照 ら し 火 照 ら し 店 店

甚 り 乃 甘 い 里 律 宗 阿 久 也 金山

庭 燎 神 樂 の 時 焼 火 火 處 焼 と 八

歌 堀 川 百 首 公 實

天 と 門 律 の 々 々 と 門 々 々 々

家 集 詠 庭 火 神 樂 小 舟

ふ き 門 律 の 々 々 と 門 々 々 々

能 系 細 二 阿 久 也 阿 久 也 三 惟

神 樂 歌 神 提 歌 千 歳 早 哥

得 錢 子 木 綿 作 晝 目 弓 立

朝 倉 其 駒 寗 殿 哥 酒 殿 哥

右 神 樂 の 時 々 々 々 々 々 々 々 々

神 提 哥 と も 阿 久 也 千 歳 の 哥 阿 久 也

せ ん せ い せ い や せ の せ い や せ

さ い せ い せ い や せ の せ い や せ

右 の 外 早 哥 得 錢 哥 酒 殿 哥 等

小 皆 々 一 首 づ 哥 有 委 一 補 遺 出

○ 右 の 外 尤 中 記 採 物 哥 阿 知 女 韓

神 太 前 張 小 前 張 等 神 樂 催 馬 樂

の 々 々 々 物 の 名 々 々 々 々 々 々 々

人 倫 植 物 虫 八 咫 々 々 々 々 々 々

右 諸 物 名 目 ば 阿 久 也 阿 久 也 阿 久 也

阿 知 女 是 神 樂 の 諸 物 の 名 々 々

採 物 歌 神 樂 神 樂 神 樂 神 樂

是 八 神 樂 七 舞 人 阿 久 也 阿 久 也

を 哥 阿 久 也 阿 久 也 阿 久 也 阿 久 也

韓 神 謠 哥 本 阿 久 也 阿 久 也 阿 久 也

せん 阿 久 也 阿 久 也 阿 久 也 阿 久 也

ら せ 阿 久 也 阿 久 也 阿 久 也 阿 久 也

二月 月令

所より出る木綿く木綿ハ紙に
はらる木ぢうそれを四手おして
かゝるとらけ神を祭るゝから
くゝと八官内省ふまうまハ韓神
二座をやくや 梁蓮愚業抄

大前張 △小前張。是ハ催馬樂
の識物ぢう大前張の哥

七首小前張の哥九首有名はる左
小記ハ一々哥あれも哥ハ補遺ハ出以

大前張の哥 △官入 △木綿志天 △難波
瀧 △前張 △階香取 △井奈野 △脇母

古 △小前張の哥 △蓆枕 △閑野 △大
宮 △磯等 △篠波 △殖槻 △総角 △

淡田 △養。神樂謡物催馬樂の訣
くりく補遺ハ出以

山神祭 所々山林ハある事あり
木の上ハ四手と切てお

火を焚火祭るをいふこれハ庭燎の
余風なる也

曆責 ① 曆責は男乃の
淡水

髪置 世俗ハ男女とも三歳ハ
あれハ十月十五日又ハ吉日

をあけい 髪置纏て。白髪綿
。松。橋の作て花。末廣扇をい

童のりもひさぎにゆひつけ産
神へ参詣とらぬその日乃食

膳ハハカテ頭ととも魚菜ハ小右
を膳のふちハ付る是ハまうんご

こて歯のあうらんやうまを祝
ふ心とも高貴の御方も三歳

みなるせめふ時ハ此御祝儀ぢう
作て花と頭とあはれも高貴ハ例ハ

哥酒氏葵髪まき 団うまはらうら
をのりもひさぎのいひまかみ我のそみん

袴着 △初 帯解。紐直。民
家の男子五歳ハある時

ハ此月吉日をあけい袴着とて交
て基盤のうへまう上下を着る

△倭初初、茶茶多く、女子七歳七歳て着
 初初る大阪大阪女子四歳四歳の時時當當月月吉吉
 日日と多多くひひ者者初初るくくと初初の事事
 ハ他国他国ふふいいししむむららりりききぬぬ
 とて女女ハ白白ききくくぬぬををううききをを歩歩
 行行しままりり近近頃頃ハ其其ききぬぬふふりりやや
 をを條條たるるををかかつつききといいくく△帶
 解解とりりハ紐紐直直の事事よよくく女子五五
 歳歳ままででハ帶帶ををせせぶぶ紐紐ててむむをを
 びびししがが五五歳歳のの當當月月よりより帶帶改改
 むむああるるハ七七歳歳よりより改改むむももあり
 ○高高貴貴のの御御方方ハ五五歳歳よりより御御袴袴着着
 九九歳歳のの御御時時御御紐紐直直臘臘月月吉吉日日をを
 ぶぶららんんとと行行るるといいふふ

◎源源氏氏棠棠著著りりややややあありりをを
 かかつつままてて孫孫ららををああままれれといいふふ

◎袴袴多多子子、髪髪巻巻てもも三三節節流流 素素流流
 袴袴多多女女中中のの甲甲冑冑ををくく、永永房房

◎狂狂いいもも子子ハ肩肩よよちちままんんををうう袴袴多多のの
 ままちちあありりととううのの鞆鞆ハハ馬馬 百百駄駄

顔見世足撮

△カカカきき足足撮撮
 △ともとものの大阪大阪

顔見世顔見世の初初る前前夜夜役役者者その芝
 居居又又集集りりとと盃盃ををああひひををいいふ

歌舞妓顔見世

△顔見世△顔見
 世手打。大坂は

てハ當月役者當月役者の出出交交りりありあり此此月月
 座座元元ををささぐぐ見見役役者者をを一一年年のの先先
 りりててかかゆるゆる初初めめゆゆ顔見世顔見世とと唱唱
 へへくく十十日日のの宵宵夜夜子子のの刻刻よりより芝居
 をを興興行行してして一一座座のの役役者者ののとといいふ
 出出てて見見物物ハ名名乗乗ををととるるしし其其後後銘々
 得得手手のの藝藝ををななりり役役者者見見物物ハ名
 乗乗ををななりり時時手手打打といいふふ幸幸ゆゆ長長六
 若若者者十十人人もも廿廿人人もも連連中中とといいふふ
 一一組組ととありありちちのの言言葉葉をを声声なくなく誦誦ふ
 てて柏柏子子木木とといいふふ此此柏柏子子甚甚面面白白し
 京京都都のの事事ハ年年中中祭祭礼礼記記ハ委委々々記記以以

◎顔見世顔見世やや暖暖いいむむ下下邨邨のの栲栲 其其角
 顔見世顔見世やや天天阪阪祭祭のの火火足足付付 安安静静

見世や船舟の火鉢り多り 涼角
影見葉仔約を戻る果太鼓 周平

綱貫 (能) 根母中太鼓未ゆれ
△(能) 此師の代 雅有

雪車 板より四方をかきも撤の
△(能) 如く作て屋根を後下りふ

揃へ北地の人八長木のつて雪の上を
往来する箱雪車ともいふ又荷

車の車なき如き形小揃へ荷物を
積り雪の上を引ゆくも雪車といふ

○唐の輪といふ物ハ板を以て作て
足はき泥の上を歩行具へ手回會

哥 堀川夏首二初とやきやうよたりま
つち山嶽の旅人ともいふのもよく

非 山嶽死を同室をなすゆゆの乃竹夏
のくや雪車扱車もあつくと素啓

標 △構いも昏 △右三字よりいふ又けん
△(能) △かしき。北地の人よりき雪の

上河歩行為は藤をこもつてゆれ
きまゝいし如く作てまゝつゆのり

よくともやせどいんきまゝかきまゝ云
非 棲るまのしつとぬふむかきまゝ素芹

哥 夫木 かきまゝ嶽の山は旅とも
雪にまのぬふをかまゝと 仲正

雪香 革の香足袋の如くいふ
△(能) かくひき頭まで及ぶりのく又

まゝまゝ作てまゝあり

非 雪雪常路ぞり松の香ほせ宗隆
狂 袖ものいてつしとや雪の

いもむきまゝとくまゝとたり 伊貞
雪竿 雪深き国より人往来の
△(能) 便の馬は竿を立て標といふ

哥 夫木 大炊御門家法
嶽の山とて雪竿のくひりやまゝ

日張りのまゝあるいふへねえ
非 雪竿やうう谷の今もても 五樓

雪の干や人よりまゝる菊の後 布門

雪垣 雪ふりき国いぢれぬぬ
△(能) 中りにるまゝ垣ともいふ

非 雪垣はなれとての仮後居 李郭

時令

又ハ田記ノ冬ノ季ニ用ユルモノナリ

雪作

北國ハ雪降ルヲ云フ時ニ云
ラビ雷鳴リ是ヲ雪作ト云

雪吹

雪風ト書。雪風文ニ
吹キ云

非

非ハ傘ハ雪ニ金糸ハ雪ニ市涼
ニ云

ゆきなれ

北地ノ山道ハ
旅人等ハ雪風ハ吹

はれ雪

ハハレト云フハ
音通ル

能

能ハ水ノ干ルハハレハ雪ノ降ル一井

哥

夫木 主殿

かみ雪

ハタヒク雪。雪ノ
降りて地ニ落

雪土満

風ハ時雨ト雪ト降リ
ハハレト云フ

雪

雪ノ字ニ付テハ
雪ノ事ト云フ

雪

雪ノ字ニ付テハ
雪ノ事ト云フ

雪

雪ノ字ニ付テハ
雪ノ事ト云フ

雪

雪ノ字ニ付テハ
雪ノ事ト云フ

雪

雪ノ字ニ付テハ
雪ノ事ト云フ

雪

雪ノ字ニ付テハ
雪ノ事ト云フ

雪

雪ノ字ニ付テハ
雪ノ事ト云フ

雪

雪ノ字ニ付テハ
雪ノ事ト云フ

雪

雪ノ字ニ付テハ
雪ノ事ト云フ

雪

雪ノ字ニ付テハ
雪ノ事ト云フ

雪

雪ノ字ニ付テハ
雪ノ事ト云フ

雪

雪ノ字ニ付テハ
雪ノ事ト云フ

雪

雪ノ字ニ付テハ
雪ノ事ト云フ

雪

雪ノ字ニ付テハ
雪ノ事ト云フ

丸ら雪

雪う石又ハ木と云ふ
ふりつりなるを見立

非風終く本くふまのつらふ五原

雪轉

△雪まろい△雪まろけ
雪中の戯まふ事と

非た名を後流の終ふまろけ千楓
女房の力おわらるるころー 来

雪佛

△雪達磨△雪布袋△
雪兔△雪獅子。雪おて

佛まこハ獸の形を作るをり
非雪佛といふは目玉う那の由

深雪

ふうくふうくも雪を
いふなり

雪女

雪ふくつる時ハ陰氣凝
りて怪し形をばらけ

非はきれ君と名をむ雪女 室庸

雪やけ

霜やけといふ如く極寒
の節の病の一説ハ病ハ

あははちあはくあつきをいふ雪の
うらといふは同じ雪あがり次なり

雪明

唐の孫康といふ人學女
を好む家貧ふしく

油をい雪中ハ夜雪の明りふて書
をよみてい御史太夫といふ官よるも

非毛とも書れは書るも何う瓦砾
かとも書子夜とくは書何う舟子

氷柱

氷水清く長く異名銀竹
氷筋。氷筈。簷の下に

満る水の氷まると山中の樹梢より
たつて凡一抱ふも及べし

非雪玉ばらけおのまひの初
尾花さそいおおれ妹うま枕

千載にまもれなきねの床やわれ
ぬんつらなまうこ甲の氷水 経房

非本の雪をさつていふ正種
正のまろつらかたけくも雪ハ鬼貫

村の中まろつらの音をさる布門
松のまろつらつらつら其角

雲英

雪と雨とまぜりて降るよふ

経家

かきくまはれき竹衣う那

みきれゆるそ山う下のまをり

連水と云ふはみよのなは宗祇

非みさるる雨霧歌くもり時支考

狂言けそとねさひくせ出しうと

そそのの雲のほり合るるし 貞徳

詩 雲英ノ詞

寒光帯雨山難白

冷氣侵人火失紅

古撒明珠

輕歌碎玉

入窓中

電

哥 萬葉集

續古今

新續古今

定為

風

雲

雷

雪

○節も砂の尾上の落れきりまをり
あうりきりけくまやあうりん

○鐘の聲故事冬のトニ丁おゆり

○狂面白くやほもくるこの下れあ
かひのさゆりふあまうん 斐波

艸木 此部ハ十一月の草木を
あひちりるま

新生姜 生姜塊(非)立戻る色
尚(非)しめしめ陽鳥

太山檀 (非)太山檀山の竹者
の苗く形 常艸

冬至梅 冬至前後ハ花開く
一重もはゆハ重もあり

(非)かみはあまの梅のそよ宗因
一重ハ一陽はくくあま梅竹叟

艸木 石榴。牡丹。山椒。芙蓉。
用意竹 芍薬。右の類とやし

とべし糞ハ分水ニ入りてよし竹
ハ蕎麦がく古屋根のこまは。菊

の根ハくく州らじくりてよし

○松杉檜柏 萩 紅花

右の類冬至の後ハ種ハたうへ
とべし冬至前ハハ州木植へん

ろい論並ハ此月草木心得葉物
際ハ委一く日本歳時記不出

生類 此部ハ十一月一ヶ月の
生類をあひじ

寒苦鳥 一名鶇鳴此鳥日本
小兒る事なし天竺

印度の大雪山ハ此鳥あり一夜
寒を苦て鳴く其声寒苦身

を責し夜明けハ葉を吹らん夜
明けく又鳴く今日死さるる

明日死をうらげ何の故より極を
造て無常此身を安穩にせんと

鳴といふ佛經の説ハ此心哥よむ

○哥 玉葉集 後京極
朝まぐ名のをまはるるもの
まがふまはるるもの

夫木...
 ○平家物語小朝拜の文云日
 いづもあ...
 若多...
 ようて...
 ふう...
 ⑩寒者...

杜父魚
 魚...
 谷川...
 口...
 ふう...
 る...
 ⑩か...

鱒
 六月頃...
 西国...
 の...
 を...
 冬...

三四尺あり...
 塩...
 ⑩十...
 解...
 其角

常用
 此部...
 養生...

破軍

| | | |
|-----|-----|-----|
| 夜九ツ | 夜八ツ | 夜七ツ |
| 寅ノ方 | 卯ノ方 | 辰ノ方 |
| 朝六ツ | 朝五ツ | 昼四ツ |
| 巳ノ方 | 午ノ方 | 未ノ方 |
| 昼九ツ | 昼八ツ | 昼七ツ |
| 申ノ方 | 酉ノ方 | 戌ノ方 |
| 暮六ツ | 夜五ツ | 夜四ツ |
| 亥ノ方 | 子ノ方 | 丑ノ方 |

時刻
 亥ノ日子ノ日亥刻子ノ刻
 事...

方角
 家普請...
 ひては...

樂事
 霜の...
 身...

お不...
 伊邊...

氣をさぐる夜をなしたる
此頃のさるる夜をなしたる

生花

山茶花 早梅 太山檀 茶花
伽羅木 このよき人ぞ此花

衣

黄菊 移菊 龍膽 番
初雪衣 裏紅 蒼紅梅 面紅梅

天氣

二午此方の雲ハ風ハ風の後
小雨。北西の風ハ久しく吹

占候

雷あれば来春米高し
如あまハ俄よ大豆高し

養生

此月つめくは物を枕ふは
べくは人の目を昏く

飲食

此部ハ十一月二月の食
物の類をあめ出れ

新子蕪

非は夏おかしかつ
立圓

于大根鉤

香の物大根于と
膏月冬ニ至後早く

澤庵漬製

此漬やう沢庵
和尙とせめく

于菜鉤

于蕪鉤 于菜
糠内五分熱く用也

占候

雷あれば来春米高し
如あまハ俄よ大豆高し

養生

此月つめくは物を枕ふは
べくは人の目を昏く

飲食

此部ハ十一月二月の食
物の類をあめ出れ

新子蕪

非は夏おかしかつ
立圓

于大根鉤

香の物大根于と
膏月冬ニ至後早く

澤庵漬製

此漬やう沢庵
和尙とせめく

于菜鉤

于蕪鉤 于菜
糠内五分熱く用也

占候

雷あれば来春米高し
如あまハ俄よ大豆高し

養生

此月つめくは物を枕ふは
べくは人の目を昏く

飲食

此部ハ十一月二月の食
物の類をあめ出れ

新子蕪

非は夏おかしかつ
立圓

于大根鉤

香の物大根于と
膏月冬ニ至後早く

澤庵漬製 此漬やう沢庵
和尙とせめく

于菜鉤 于蕪鉤 于菜
糠内五分熱く用也

青干菜 大根の葉と繩をてゆ
乾かしてふかけて干す

何れ酒 飾米を蒸て酒とも
小醸したるものあり

南部の菊屋は製茶する物名産
常より何れも各よりの李らん

みぞれ酒 あられ酒の少しふ
アツるりのあり

用意品 当月菊の雨覆を
さるべし菊の花清

くはくろふ所の上を切べし土
地と見立く種をうつく作るべし

委しくハ菊品とる木上出れ右の外
青柚葉 つきのみまく久しく貯

へる法まこハ柚餅。金柑を
九年母をすし其外菓物久しく

貯す) 当月製するよし
のし 訣委しく 日本歳時記
茶湯時時記 此二本よ

以指南抄ハ茶湯會帝の献立より
平生の料理月々ふこけく記

十月

十月飲食 並料理献立

禁 龜 蟹 鷓鴣 干鰯
物 干鰯 乾物の魚 生乃

非 生の 薤 生菜
又火う 焙す肉と食ふべし

好 雞肉 九月より 此月を食
物 べし 稍補あり 〇 雀肉 冬

食 十月の部
委しく

料 汁
あられ酒 ねぶら

かさ。ころ葉 玉子
大根あり 若しけ。

たこ せきぎ
葉つき大こん ぶと

膾 きんし
きんし 大こん せうら

きんし 大こん せうら
ねぶら 花屋の海

清汁 清汁 清汁

目 小柄不 差味 差味

鯛 鯛 鯛

煮物 煮物 煮物

雁 雁 雁

和會物 和會物 和會物

吸物 吸物 吸物

縦のこ 縦のこ 縦のこ

精進 精進 精進

新色 新色 新色

清汁 清汁 清汁

贈 贈 贈

大入 大入 大入

差味 差味 差味

...

...

...

...

...

...

十月
 煮物
 大かぶら
 むぎとろ
 大かぶら
 むぎとろ
 大かぶら
 むぎとろ
 大かぶら
 むぎとろ

和會物
 大かぶら
 むぎとろ
 大かぶら
 むぎとろ
 大かぶら
 むぎとろ
 大かぶら
 むぎとろ

時鳥
 大かぶら
 むぎとろ
 大かぶら
 むぎとろ
 大かぶら
 むぎとろ
 大かぶら
 むぎとろ

魚
 大かぶら
 むぎとろ
 大かぶら
 むぎとろ
 大かぶら
 むぎとろ
 大かぶら
 むぎとろ

青物
 大かぶら
 むぎとろ
 大かぶら
 むぎとろ
 大かぶら
 むぎとろ
 大かぶら
 むぎとろ

十二月部目錄

十月
 陰陽生
 津呂

十一月
 陰陽生
 津呂

十二月
 陰陽生
 津呂

日令
 大かぶら
 むぎとろ

乙子餅
 大かぶら
 むぎとろ

御國忌
 大かぶら
 むぎとろ

臘八
 大かぶら
 むぎとろ

月次祭
 大かぶら
 むぎとろ

三事始
 大かぶら
 むぎとろ

最勝寺灌頂
 大かぶら
 むぎとろ

御佛名
 大かぶら
 むぎとろ

柏梨勧盃
 大かぶら
 むぎとろ

小晦日
 大かぶら
 むぎとろ

| | | |
|---------|------|---|
| 生身魂 | 前聖神事 | 子 |
| 日御齋宮爲馬掛 | 御贖物 | 子 |
| 大枝 | 米洗 | 子 |
| 岡見 | 陽松營 | 子 |
| 年籠 | 年守 | 子 |
| 大年 | 大節季 | 子 |
| 除日 | 分歲 | 子 |
| 節追儺 | 節分 | 子 |
| 豆打 | 福内 | 子 |
| 柀挿 | 鰯挿 | 子 |
| 獲枕 | 厄拂 | 子 |
| 吉田大救 | 厄塚建 | 子 |
| 五條天神詣 | 寶船 | 子 |
| 大原雜候寐 | | 子 |

月令

△衣配

△煤掃

子

△古曆

△札納

子

△節季候

△星佛賣

子

△年木

△年取物

子

△年の市

△餅搗

子

△寒聲

△寒垢離

子

△寒念佛

△臘

子

△時令

△年内立春

子

△寒

△歳暮

子

△年仕舞

△歳暮狀

子

△春

△冬梅

子

草木

冬梅

子

月

日

子

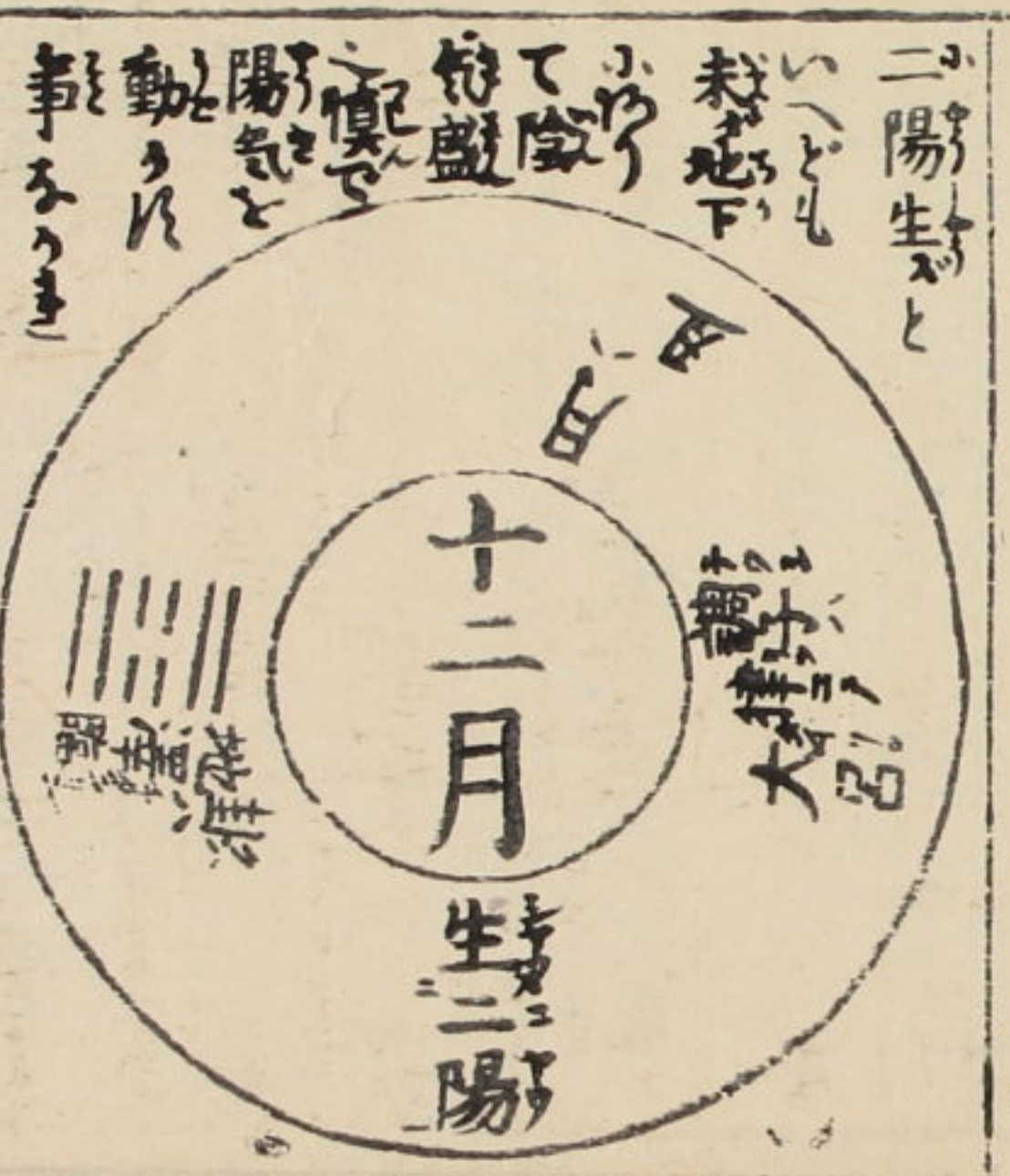
| | | | | | | | | | | |
|-------|------|------|------|------|-------|-----|------|-------|-----|------|
| △鹿賣 | △寒造酒 | △寒曝 | △煮凝 | △飲食 | 養生 | △雞乳 | △寒鯉取 | 生類 | △臘梅 | △早咲梅 |
| △料理献立 | △茶食 | △寒の餅 | △凝豆腐 | △鮓味噌 | △屠蘇の方 | | △鵜巢 | △八目鰻取 | △探梅 | △早梅 |
| | | | | | | | | | | |

必用

此部は雨の占候の心符。他行の心符。生花正式。天氣と候

十二月の部

△印ハ俳の季に用ひ来る物



親子ハ大呂ハ大呂ハ陽氣出入と欲して陰をゆるさる。出候。卦ハ地澤臨ハ水澤腹堅と。意して陰をゆるさる。陽氣泄る。所カタルバ氣が和セる。地澤小臨人々水とらしむ。意ハ月令に出

十二月 △臘月 唐書。去嘉正月。史記。△季。異名。冬。礼記。余月。雨。節。窮。節。頻。延。

△急景。白紙。嚴。正。暮。要。△暮。終。留。續。△抄。冬。唐。詩。△三。陽。月。異。名。

和名 冬月 歳五 春待月 梅初月
名 冬月 歳五 春待月 梅初月

今月 冬月 歳五 春待月 梅初月
△かきりの月 △此月 臘月 臘月

異名註 臘月 △此月 臘月 臘月
和名註 先祖を祭る也 臘月 臘月

臘の譯ハ廿七日出 嘉平月 臘月
の始皇臘の名をかえて 嘉平とす

季冬ハ冬月 臘月 臘月 臘月
ハ爾雅ハ十二月を 塗とす

冬景ハ氣色の短シ 臘月 臘月
窮節ハ節のまじりつるなり

歳正ハ殷の代の正月 臘月 臘月
柳冬ハ抄ハ冬月とす 臘月 臘月

未とす 臘月 臘月 臘月 臘月
とす 臘月 臘月 臘月 臘月

ハ一とす 臘月 臘月 臘月 臘月
まはとす 臘月 臘月 臘月 臘月

師奉師ハ僧也 臘月 臘月 臘月 臘月
を唱本ハ柳經ハ僧の走とす

月多し 臘月 臘月 臘月 臘月
極とす 臘月 臘月 臘月 臘月

哥 蔵王 春待月

とす 臘月 臘月 臘月 臘月
春待月 臘月 臘月 臘月

同 梅初月

秘蔵 年よつ月

師走 業平

莫傳 暮古月

蔵玉 三冬月 定家

いそつふつ 雪のち

いそつふつ 雪のち

いそつふつ 雪のち

莫傳 ちやこ月

ひき人のとたまを待つる秋ふ月
ねやいのちのため るきん

俳 かねの師を草小枝密柑 鴨谷

七律の仲るに踊る時きん 冠里

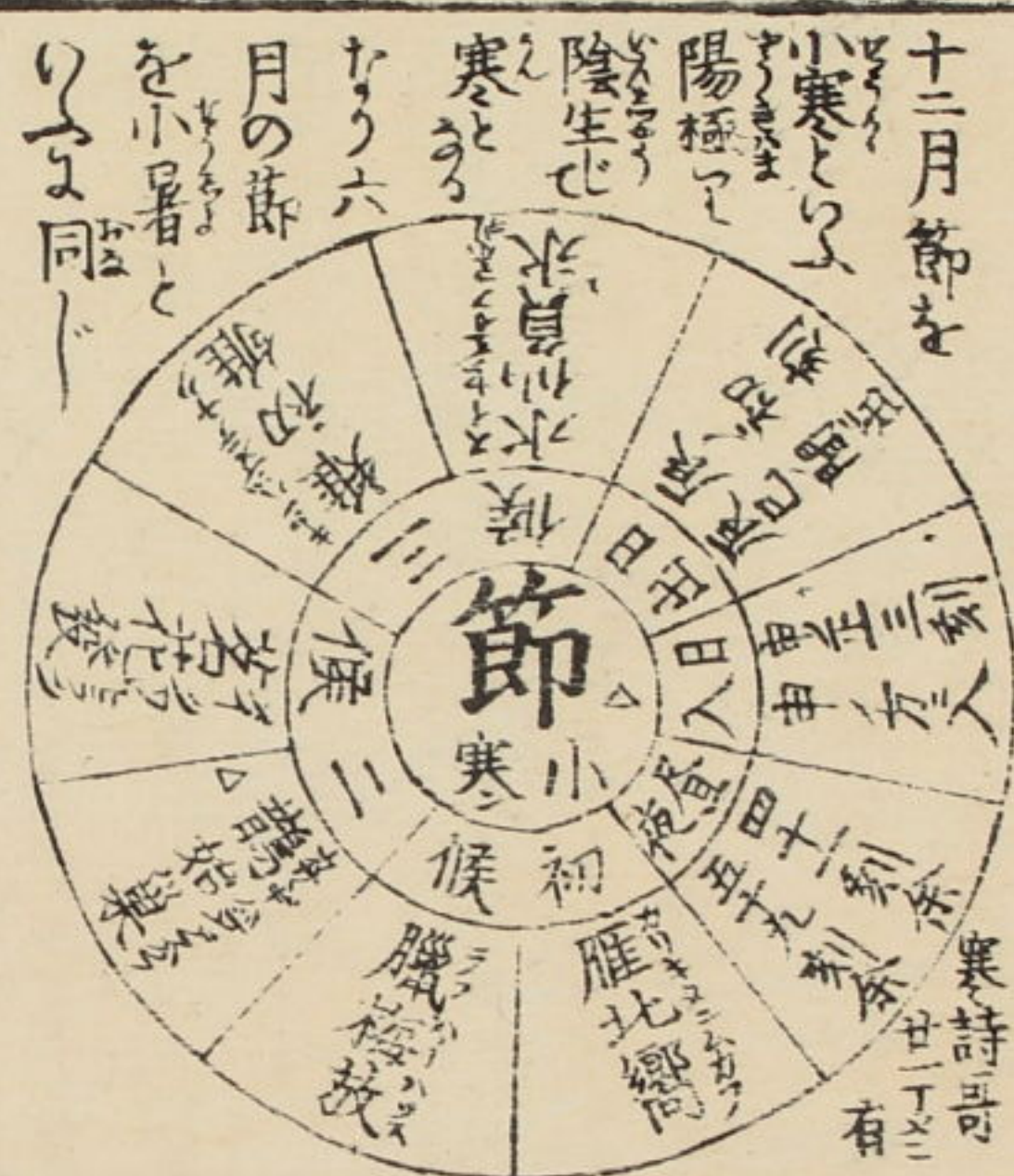
五言も状とかけて時きん 石貞

横枝と喜よ月のおもろく 隠乙

扇ねく後よ時きん 巨龍うね 積雨

狂 正月の樂をうたえをひくふとど
やもも師をの打ちりおんり 家蔵

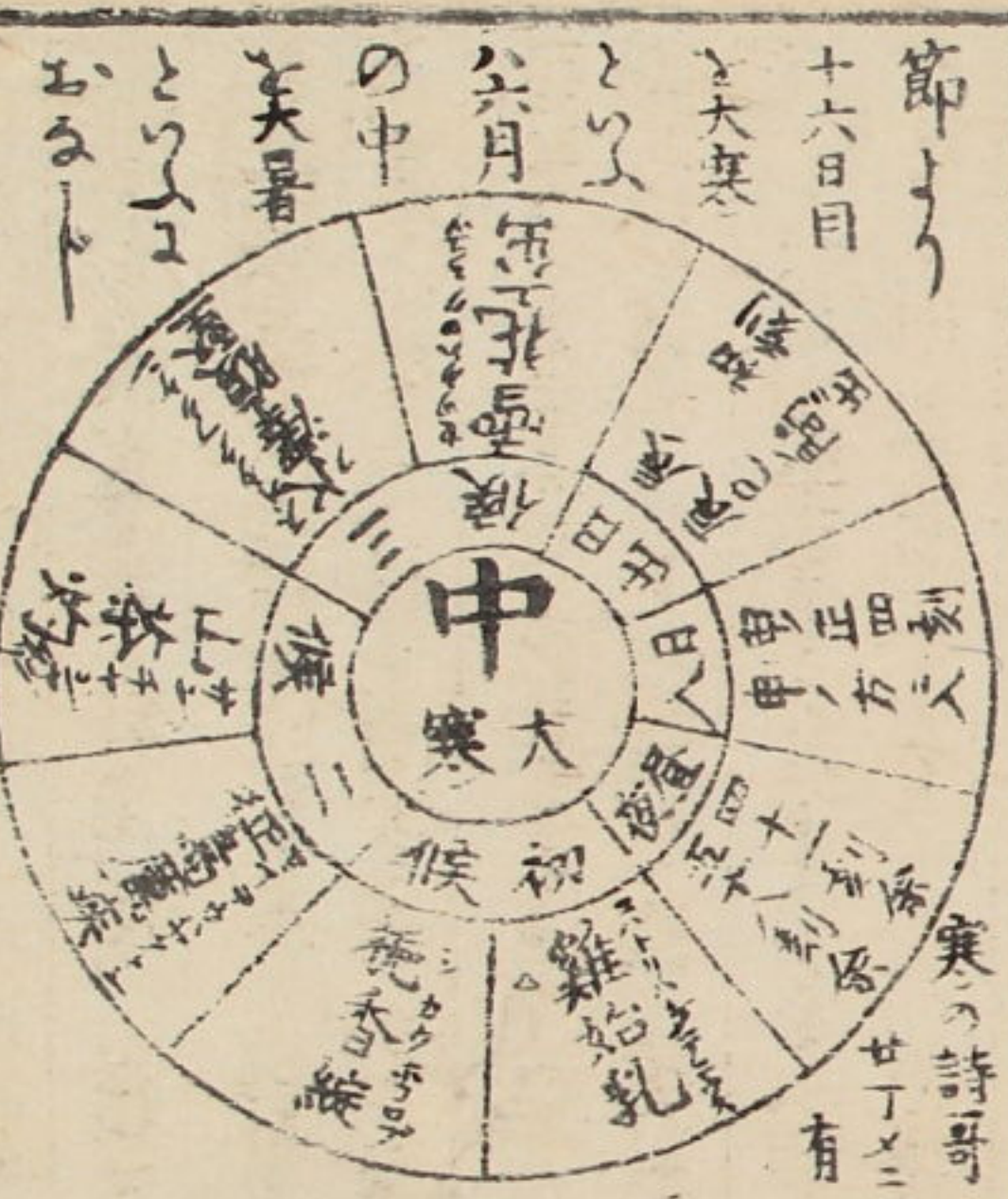
小寒 節の名(七十二候)草木七十二候
昼夜長短。日出入等左ふ記以



雁北小寒ハ陽ノ順ニ比シ歸ありこ月令
の註あり。臘梅放ハ此頃咲らう。臘梅の
譯ハハト小委。鶯始巢ハ鶉ハ木を
啜てて鳥みくは詩よも多く作りはりのうら

此頃の陽氣小うして始て葉と定る。若花
發ハ若花ハ茶の花。雉始雌ハ月令の注。雉ハ
火畜らる。陽氣に感して聲を出は。有ハ水
仙。水仙の花水と自ま。立のひる草らう

大寒 中の名(七十二候)草木七十二候
○昼夜長短。日出入等九ふ記以



○雞始乳ハ八月令の註ハ雞ハ木ニ屬する
畜類ニハ陽氣ニつき。後の形ゆを

い事とらう乳の字をつるむとよませた
北陽氣に催されてつる事とらうむらび

○挽香統といくつしの花のひらく事あり
○征鳥厲疾とい鷹のこげくまるとい

○山茶灼といつて死の咲くことうの水澤
腹堅とい水のある澤の水がこたへる事

つる事とい雪花六出とい雪の花が六ひつ
つるの雪の雪のまきく降る事あり

大 天氣 東風吹が晴天冬用の土用
寒とい来生六月ひてり

大 土牛童子泥像と立 文武
天皇の

三年十二月天下疫癘多く死
とらる者多かりしハ禁中にて土の牛

をつらうく儼とくはらひをこせ
多かり。唐土にも土牛泥像をつらう

て国々の郡縣ふたて、寒氣とは
らうすいむいとらる事あり

日令 此部は十二月一月の日決定
たる事支の定てらる事とらるハ

朔 乙子朔日 物の始を甲といひ
未といひとく故終り

の月の朔日といひ乙子といふなり
○俳 月月のつらうを狂 凡東

乙子餅 弟子餅とも書く
今日餅を食ふ六年

の間無事にくらー 今日朔日の
終つてはまき元日餅をいこ

かきいひ今日もといふるべし
○又一説は今日けいとい唐土に臘

此の祭の餘風といふなり
○俳 乙子臘といはしり食ふ 宗目

川浸 川つらう解 今日餅は
食ふ時に水難といはると江戸

ふ事らつても今日と川つらうといふを
深き譯わさ事委とくも臘の処論有

朔 忌日御飯 季ハ六月といは六月
季ハ六月

三 今日沐浴といは火をさる
日 京太秦佛名會今日らり

日 京太秦佛名會今日らり

御國忌 今日天智天皇御足跡あり。近江國崇福寺にて行つた崇福寺の昔の志賀寺と云ふ寺あり。寺にも哥小詠あり。八雲御抄

中世三井寺に移りしなり。今も其跡のものとまき天智天皇の聖天子よく中興のあらはれ此君の事なり。御国忌といふ此君の事なり。

卯大。大神祭。卯辰の酉日より季六和四月といふ。卯辰の酉日より季六

子今日延又ハ登の表を日にさす。日セハ登風を去る事妙なり。

六不成七。此日遠く行空り。日就日日必也く所不遠せと。

辰臘日。季。臘ハ唐主ハ臘ハ今日也。臘ハ今日也。

八温槽粥。臘ハ粥。秋尊今日曉の明星を見て道成。

多。日。故。本朝。小。京都。天龍寺。相国寺。東福寺。建仁寺。萬壽寺。右

五山にて粥を製するところ所製の粥昆布串柄大豆粉薬菜と合攷。唐土も此日寺々しくいろくの加薬を入る粥を煮て喰ふ又檀家へて饋る是を臘ハ粥といふ。道成乃

乙け委しく博物笠の部より出たり。ハ今日竈の神を祭れ。大ハ幸い日あり祭神委しく八歳時記不出い。唐土も此日寺々しくいろくの加薬を入る粥を煮て喰ふ又檀家へて饋る是を臘ハ粥といふ。道成乃

の神あり。いまて見へり。子方星を拜しく幸ひを受く家ハ黄き。羊らししを以て祀りたればふもつ。みりく大富を得ることを。

八京。智積院。論義。河内。の。日都。山。酒。宴。と。なり。

ハ。妙。薬。今日の水を貯へ。明年万病を治れ。此水よく丸薬に。製方。古。時。ハ。大。小。妙。なり。今日

八。妙。薬。今日の水を貯へ。明年万病を治れ。此水よく丸薬に。製方。古。時。ハ。大。小。妙。なり。今日

八。妙。薬。今日の水を貯へ。明年万病を治れ。此水よく丸薬に。製方。古。時。ハ。大。小。妙。なり。今日

八。妙。薬。今日の水を貯へ。明年万病を治れ。此水よく丸薬に。製方。古。時。ハ。大。小。妙。なり。今日

八。妙。薬。今日の水を貯へ。明年万病を治れ。此水よく丸薬に。製方。古。時。ハ。大。小。妙。なり。今日

八。妙。薬。今日の水を貯へ。明年万病を治れ。此水よく丸薬に。製方。古。時。ハ。大。小。妙。なり。今日

八。妙。薬。今日の水を貯へ。明年万病を治れ。此水よく丸薬に。製方。古。時。ハ。大。小。妙。なり。今日

八。妙。薬。今日の水を貯へ。明年万病を治れ。此水よく丸薬に。製方。古。時。ハ。大。小。妙。なり。今日

八。妙。薬。今日の水を貯へ。明年万病を治れ。此水よく丸薬に。製方。古。時。ハ。大。小。妙。なり。今日

の水と燈心を浸して明き火を
くもせバ蛾皆去る 廣義に出り

十日 御體御上奏 月次祭
季六月

十一日 神今食
右御體御上 月次祭
神今食ハ 朝庭ハ公事
季六月

よて六月十二月西度行ハ
六月の條小記 信る尚委ハ補遺ニ出

二十日 山 南禪寺大明國師忌日
城 妙心寺開山忌 博物筮ヲ委シ

十三日 事始 正月事始 今日内裏に
大臣以下正月の行司を

定む又天皇元日の御装束等を辨
備と。民家亦も今日より正月の

入用の品試々の用意をなすと
煤拂おなくハ今日とるなり

排はるも又塵積る事始 鷺水
事始おもらるる人々死 杉風

狂のどうも正月の月のわね
せめく氷の解ともせよ 政長

十三日 荷前使 昔十陵八墓を定め
られ其所ハ勅使幣を

奉るひいといふ荷前ハ初穂とを
よこて神に奉るいふ義ニ十陵と

いハ御代々天子の陵十ヶ所ハ墓と
いハ親王大臣方の墓ハヶ所なり此

事ハ崇神天皇より想ふと四
季物語より出り尤勅使ハ吉日に

撰はるれども今日ふ定むといふ
排内院ハ電五ていハ十陵使 野史

十四日 不成 今日より十六日まで
就日 泉涌寺佛名會

十五日 今日沐浴 身を清むれば
無病にて諸の災火ともぬ

十五日 寂勝寺灌頂 今ハハ 菩提
ハ岡崎ニあり

灌頂の事くりく言俗佛事篇
といふ書あり面白きことなり

中 御髪上 蔵人御髪を梳
髪を賜て主殿官

午 御髪上 蔵人御髪を梳
髪を賜て主殿官

人松明を献し焼く上鴈ハ
ぬけく髪を箱に入置此日やき
て灰に沈香を和し器に入まき
よき地よりつむい説下午ともいふ

御佛名 名だいらん雲の
上人名乗とるくと

僧を請下て三世の諸佛の
御名を唱ふるなり三世乃佛此

御名をとりまきバ作まる罪を
雪くとも消るやし哥ふも詠り

禁裏十九日より廿一日まで
行り仁壽殿の御本尊を移し

て御帳の内よりけ佛前ふ香花
庇り地獄の画の御屏風とたて男

女も佛名と唱ふ名だいらんつ事
佛名終て殿上人各名と名乗るなり

哥三世の師の名とまらるる
つともやこよひのそらるる人 俊頼

千首五時のかたやまていとも
佛の寺名色彩のそらるる人 師兼

非 風坊くみ地獄も屏風も曾一
佛名も宗貞の時もこと 疎松

狂 地獄の怪ふてねぐり佛名も
やまぬるるの極楽のうら 來中

被綿 佛名の導師の僧も賜へ
蔵へらく僧は着ふらるる

哥 堀川女即百首

かつけくわいさくろよおとけく
むらへくく人せさかして 俊頼

非 寒風ふ切き首つけ悠 蛙舌

拍梨勸益 昔攝州拍梨と云
地を左近衛府よ

よせりりれん 此宮府ふ其拍
梨れ地の利今を以て酒を造り
ふるトく佛名の夜ふ飲宴とこれ
をかやちの勸益とわらう

廿山 嵯峨秋迎堂とくはくし
日城 本尊開帳わり

廿 今日病人と見舞ふ事ふらさ
日 必くつこ。積川端へ行るとまら

廿不成。今日房事をつし、カバ
日就日三年の壽を延ぶといつて

廿山 大徳寺開山忌 今言は南紫
野より開山

廿大燈國師といひ延元二年正月廿二日寂
非 系入のゆりゆりは大徳忌考井

廿一 遍上人の三日の時宗の寺ふと
日三 不残法事より博物堂小委

廿四 照虚耗 今日味のわく火灯と
照虚耗をなげ富貴を

廿四 灶神送 今日清の世ふ今日灶
神天よ上りて一日あり

とく家々灶神の札を供物と云
禮拜一神を送ると云て其札を燈寺

新ふ灶神の札を張りて物を備へ祭る

廿四 占候 今日米の飯を碗に盛りて
かまどに供まじり家内安全

ありて来年の事と云らう一やを
うの供へる飯をもちつけて見るべ

碗よりほいあまき来年よ
ほどよ雨ふりてさうりなら

と粟のたるふとぬまてあると
来年大水出ると云りい乃

外碗の底かまじりて来
年大ひてりやう

廿八 鉢叩結頭 極樂寺の本堂よて
踊念佛らう。結願を云と云事

廿九 小晦日 明日と大晦日といひ
也へ今日をかきいり

日 魂祭 今日はき人の来る夜とて
たよ祭をなげ報恩経を出

昔八今日もはしり七月の條は倭田舎
よハ所より今日も祭る之非ふ公暮の

魂祭と云又ハ冬は素物結びて季に依
非 魂祭と云へはあやう邪 立雨

廿 夫木をたてのまらおとさけと云は
たよとひ字やまなだの里 和泉式部

生身魂 両親又ハ親族の存生乃
人を別棚をまつひ祭る

生身魂

生身魂

田舎よ其風儀今ものこれにて月
の條よ委一俳よハタの景物と結
びく季と云々

俳 ことどもう巨燈てなれまゆ乙州

晦京 祇園神前大般若經轉讀

日都 同子刻よりけりか神事なり

晦豊 和布刈神事 今夜丑の刻
社人帯剣也

鎌持 松明を上げ海底に入ると
潮水 左右に開き下り候ひ和布

を一録刈取く元日神前供と
不社 豊前企救郡隼部村に故

早鞆の社とい昔此所長門国に属
神功皇后の時より豊前の国に属

俳 諸技と云々の下や和布刈の枝荷雪
にろをと親ハ和布刈の枝のよ務衛守

狂 和布をかりて林と云々
伊勢 伊勢齋宮村の森小祠ゆ

日勢 齋宮繪馬掛

今小に繪馬と掛く其繪は松と
砂金袋の繪と書何ともまればけ

おく昔此所は齋宮あり其時ハ
今日大禊ありて繪馬を奉じ齋宮

の儀式絶く其例より繪馬と掛
よや又今夜繪馬と掛る事行疫神

と看しるるこころ増山井に出
俳 赤の画を掛る柳水

御贖物 公事根元は六月同し
とありまは六月乃

部ハ世日よゆに註よ四社かり
けと指し上かそり紙穴

をあげ御いきば入ると弘仁五年六
月より御薬の事よては

御贖物 奉る大く素蓋鳥尊の
千坐置戸の枝やとりやう起

ぬる事きりまの按るに根源の
説おつらまのこの

おきこころはこれ其罪
と贖ふかのの義天子乃

息を入らうハ御罪をまぎらして
て廿日の秋...
代の心よおさうか...
西月とも廿日は...の柳...
わ...
一息の...
荷風

廿日 大被
廿日 大被は...
素能

米洗
廿日 米洗...
一説は九日...
為米を廿日洗ひ貯へ置とも...
廿日 米洗ひあとして...
萱月

廿日 岡見
今夜子の刻高き所...
東の方を見て...
の如きハ明年凶...
年吉...
又今夜高き岡...
さまに着て...
あ...
温故日録...
俊頼

廿日 門松營
門松立る...
と...
夫木...
山...
子年...
堀川

廿日 年竹籠
伊勢大神宮...
一説は伊勢大神宮...
夫木...
信實

廿日 年守
守歳...
春...
夫木...
信實

廿日 大在
大晦日...
の...
夫木...
信實

卅日 **大節季** 掛取（非）掛毛（を）を
人せん栴の花 兒涼

○掛取ハ雜ともいふ。大年大晦日大拂
のつけ委しく日本歳時記拾遺に
出たり此書ハ字義を正し諸書の
故事を引き面白に論め見しべし

卅日 **除日** 除夜△除夕。除ハのぞく
とよひ字あり今年チウのぞ

き去てく来年よなるをのぞ
○除日詩哥左記ハ尚歳暮の條見
哥御集 伏見院

こよひもをのぞのつけきん
たういもくたるをふくろく人

拾遺集 源重之

詞 夕のぞききり。らるるを
くま竹の一夜ぞう。やとこにやう
まぬるなる。たまなる。まのぞ
。年もいぬう。年ハ一夜

連 ぬい女とぬいたる年の暮 紹巴

非 降ふて年ち感ん老の夜 支考
硝子の一夜あらしや花のま 今

うの方を表とちや大三十日 竹川
天三十日分はまぬねのま 湖春

うもくと大年の市は女のま 半窓
大卅日やうて底ぬけみみの川 連孤

一かゝ大晦日にきてままい 紅素
狂 ざらぬ世の中なるをたてと

いふらだらのまをて除夜 貞左
卅日 **分歳** 唐土ニ大年ノ夜先祖
ヲ祭テ家内打ヨリ酒

宴ヲナシ金銀錢ナドヲ家族奴
婢等ニ贈ルヲ云トソ

卅日 **萬年糧** 唐土ニ卅日ノ夜米洗
ヒ籠ニツミ米ト飯ヲ

盛リテ上ニ松柏ヲサシ蜜柑等ヲ置元
日ヨリ三日ニテ飾之今ノ蓬萊此余風也

燒燈 此夜院々ニ燈ヲ燒ニト如
白彫トイヘリ

設火山

階帝除夜每殿前諸院
火ヲタケ事山ノゴトシ又

コレニ沈香ヲタキテ火光暗時
煎ヲ以テソク香數十里ニ及ブ
一夜ノ間沉香二百余衆ヲ用ニ
煎二百石ニ過タリ階書ニ出

醉司命

都人除夜ニ至テ僧ヲ
請ヒ春經シ酒菓ヲ

備テ神ヲ送ル合家簪ヲ燒テ紙
錢ニ代ヘ竈馬ヲカドノ上ニハリ酒
ノ糟ヲ以テ竈ノ門ヲ塗ルナリ是
ヲ醉司命トイフ事文類聚ニ出

除夜

吳鸚

老稚均欣載安
オヒタルモワカキ
モヒトツニコトシ

一年安ラカニ暮シ
タコトラヨロコブ
低吟淺酌共盤

桓
ナウタラウタヒヨイホトニ酒ヲ
ノシテニチユルリトシテ井ル
瓦瓶春

透屠蕪暖
ヤキモノノトクリニハヤ春ノ
氣カトラツタカシテトノノ

酒ニアタ
石鼎香銷柏子寒
ヨカガ
ケレバ

石ノカナニタイタ香
ガキエテ寒クナル
無限世給多鞅

掌
イロクノ世間ノ用事テ
一世話カ多ヒケレド
那知天

運又更端
トキノハリアハセハシレヌ
ニタ一年アラタメル

迎新送故須臾事
アタラシイ春
ラムカヘフイ

ノ間ノコトシヤ
不倦挑灯坐夜
タイクツヒスニトモシビラカキ
タテ夜ノケルニテスハツア井ル

除夜五字對句

同上

夜將寒色去
今宵光景舊
ヨルハサダイケシキヲモツ
テイヌルヤウナ
コヨヒノケシキガモウ
フルビテ

燈向曙光新
來日歲時新
トモシビモアカツキハヒカ
リニ向フテ新ウチルヤウナ
タラシウナ

除夜七字對句

詩楚

晚景莫追
窓外驥
イチヤ
コトシノクレノケシキハミドウトノ
ヒカゲヲオフコトヲスナ
イニテニフ

春風不染
鏡中絲
五更來
アスルカヒハカニニウツルシラガ
ラソタテモクレミイケレド
ヨアケニハ春
ガクル

豆打

△爆豆△撒豆△福ハ内△鬼ハ外△禁中ニも熬豆と

撒 瘵鬼をばはらへせらる

事 宇多天皇のときより始る民

家 豆をうらうら福ハ内鬼ハ外と雑をかりり豆をうらうらハ

来る年の支は當る者つとじ是を辛男といふ又豆と打事ハ魔

目 豆打といふ義ハ風俗考より出

○唐土も今夜赤丸と五穀とをく事後

漢書の註より出たり赤丸といふ事ハ

非 豆をうらうらと云ふ其角

又 聲や口の内ての鬼を外了兩

免子連とて内をうらうら外 来山

枚挿

△枚挿。冬も青翠にして貞と守るは操りとの説より

○世俗は門戸ふさぎて目つと鼻

つことと同しく鬼と追ふ之神代卷

にいへらされ枚挿のふとゆりとの縁

ふよらるや

鯛挿

△鯛挿頭。井クニサス△なより此頭。いとしの

かいら疾鬼邪鬼のきくよもの

也へ今日さるるべし。土佐日記

節今の條より曰なよりのかいら

いいらき家小家の門より後といふ

事ありなりハ鯛の古名と思

る然まども勢州よりハ鯛乃

魚となよりのい名吉とも呼

いけまう是なる事ハさるる後

○井クニサスとハ節今の夜鯛の頭

を門より後をいふ兵竹集より出

○世の中ハ粒ちりけもいりたの

をいふむもいりてをいりて為家

○非 子の緒の支おふと云葉松推

核ば守る子前と茶師の事也鳳

○狂 核さ一夏ておむれかられと云

ちめりトよいりてさるるよ 貞左

貊枕

△貊の札。白澤といふ獸乃事と白樂天のいり節分

の夜獺の圖を畫く枕とて此の
悪夢を見れば諸の邪鬼と避る事
妙之俗は獺ハ夢を喰ふ獸といふも
いれり依之左ふ獺の正像を出し

○唐白樂天獺屏讚曰

寢其皮辟瘟

圖其形辟邪

今謂之白澤



○五法水にて寫したる此御像と家小
所持とれば時疫や病うつらば狐
狸惡氣其外諸の怪に災の災
をさる事なり一乃一怪一き事なる
又ハ怪一き病人たりば此白澤
の像の前より咒文を唱ふまば
まいげん神の如し近世大坂吉文
字屋市左衛門といふ本屋にて五法
水にて寫したる此白澤の像と賣し世
間より守札と違ひ涉世録其外諸書

お出く正一き事なり余も此像
を家にうけて凶事の吉事となり
たる事多し依之諸人の為こに記し

(俳) ともあはれ世の夏を變まら
みト年でもいれり一ロ 湖月

(狂) ともあはれ世の夏を變まら
みト年でもいれり一ロ 湖月

厄拂 厄落。節分の夜民家の
門を厄拂いともいふ

て乞人の通ふ其者より少し其錢を
与ふ事俗なる祝語とて俗に京

大坂やく専らぬ事一田舎にあり
国よりて今夕毎家に社へ來りて後

をころ所もゆく是ハ禁中ふ世日お行ハ
る大夜の余風なりし厄拂の事奇

はらその沖へはことつ素盞烏
尊は千々に置所お物をばて拂ふし

多其千々に置所とらるれ沖に
べ。祇園はうけの夜も身の厄は

拂い今為何なるものおも我身お添ひ
たる物とて道お落し歸らるる

たる物とて道お落し歸らるる

たる物とて道お落し歸らるる

たる物とて道お落し歸らるる

たる物とて道お落し歸らるる

世も同心の人々厄年迎真し講多し
厄のつけ妻日本歳時記出

非 性ある信令今も厄は負雌
下もふれや進排進一厄排 怨由

狂 七世とて何とて何とて
やくもたぬやくと排へ 駄足

京 吉田大枝 節分の夜十部家吉
都 齋場内陣旧の齋場内陣

夜を修行と式ハ正月十九日清夜と同
し。又節分の朝十部家宗源殿にて

神道護摩と修と疫神齋札三
千枚を出以諸入受く門に貼る

厄塚建 節分の夜吉田神祇堂の
を築く祭文をよむ是を厄塚建

といへり正月の條に見るべし

非 厄塚も空々塚たり排なよ 桐左呂

京 五條天神詣 勝の餅 白虎賣
都 節分の日八林裏へ

白朮小餅 寶船を上る節分は
諸人参詣して右三つの物とする

白朮は家へ歸りて焼く白朮と焼く
邪氣百鬼と辟くといへり小餅白朮

も昔例小餅 宝船は是を賣む
近世其料物を社司よりて製せしむ

小餅を勝の餅と書すハ小と勝は向
音也といへり此餅は社地の内勝

軍地蔵尊に供する餅也といふ祭神委
非 多のせてくれば宝船の味也

寶船 紙に宝舟を繪き書し節分
の夜人の寝る床の下に敷く

或人のいづく寝るはね之我を稻と
て舟に積りて心なす除夜明方

に人のすくむはねつひとつふ同ト

非 足踏してぬきぬき宝舟 看月
室のついでにたりはの餅 厚平

枕妻と二人を床をたたくは 半窓

狂 たたくは床をたたくは 捨替

おもむね風の後の餅を 捨替

節 大原雜候寢 山城国大原江
文明神の祠へ

野に男女黍詣通夜して夫婦乃
かゝるひまをばさひて山州名勝志
曰昔蛇井出村の大淵とソ池大
蛇住む時く里小出く人ととら
んとと西へは蛇出るとたと男女
一所より出たり野てかゝるひま
るれを大原ぶと孫とつてこの事
よりおろろく其後ハ昔ハ乃
夜産沙神の拜殿一通夜と
とと

非 せちもの母て自利のこね鬼貫
不指媽なをある雜候處の文人

狂 よい程のくもれをさまひに
ふくろさく絲り大束のくも 遊糸

月令 此部ハ十二月一ヶ月の
日の定まりたる事と記し

煤掃 ことごとくはきこくを
とととを歳暮の物と

日一事ハ百姓ハ春ハたがや一夏
くさきり秋叔む冬のと其暇は
得く一年よつとも煤をくくひ
て春を迎へるひへふんねらへ

せあり又内裏の煤とくしつて陽成
院の御時となく此事とせる公事

あつて 墨物語よの家の煤の疑る
繁昌と神代巻大巳貴命國境の

文中おろりの唐土も掃塵らふて
此月とほひのきをなと見へり

哥 かのらき外山のこものさあじ
とれまのやもはうとたり 經行

非 ことごとくは何ととも捨らばは
とくはきこくをさして仕あがり全

狂 ことごとくも出申ておとすこと
よとせのねもかこりかゝるハ 樂水

衣配 源氏玉うつし巻ふ衣
の事ゆり其文お書はる心

さハ年れこれ人々の装束を
おとふたかゝるをさしてはる

くさるるを御覽下して多くは
る物をかへく恨まればなほ
事して御衣櫃箱も入さむひて
それかきつててぶして入ると有これ
くお衣をさむりたる源氏の
はつらつとせり民間にも親屬奴婢
はらわらへぬ世に世に物も
るまきぬくはらまら

非 いふくは馬場のせんご園宮
衣をさむりたる源氏の

狂 くれくおを配りのきぬくばり
二つにちりぬきぬきまらり 松花

札納 門戸よりはりたる寺社の札
くうおさむりたり

古曆 曆の末△巻はつる曆△巻納
曆△右△巻曆

新六帖 二と六の曆れおくおきよせ
くこの日ぬのわともふた 知家

非 やつじき日も八日を古曆 良道
麦のふけ馬の末れ二三寸 追風

狂 馬のいふらもせねこりく川の
あのもちの月もやとらば 流霞

節季候 △燒等△乞食がかりに
裏衣白をさむりたる

家く小来く節季はだひくと呼
りて来をさむらひくはだひくと

乞食の言やるべし昔ハ赤き縮み
く頭面はつゝ烏帽子を着たり

乞食の妻もど同く
白毛緬は顔をつゝ亦前がたせ

自婆寺といふく米銭をさむり此
ふもの京師よのさむる

非 けのけく食事くともあつ馬尉
まらふいとおのりてさむりたる蜂房

狂 くらたてく世まら坂のせこりく
通アヤまゆれいひくはらまら 貞柳

星佛賣 年初おきまの星
祭中おき祭りのひ御修法

ある馬△月十三日佛師家年属星曜
の像を造て禁裏へ奉る民間ふる世まら

とらぬ(来羊)の属星と夜行して賣物者
の属星とつ六九曜星と人の五性小配

て毎年の属星とまはるりの九曜といふ
日月木火土金水羅計都合九星也

年木 △年木熊の内裏(薪をとる)
御多木とて早春これふるじ

おつておさてなかり木など大稱は其木
をさる者を年木熊といふなり

哥 夫木 後九条内大臣
さしはの社山川のいこふなり

いそくとし木をほとせまつらん

狂 花のつく木も携る老のほまの雪紅
をのとり木といふなりなり 祐善

年取物 正月ふ用のさかぎり米年
木其外来春用ゆる物を

年内ことり貯るをいふ

俳 九條菖のさぬいふふをね許六

年比市 正月の儀式ふ用ゆる物と
賣る市をいふ 毬打賣

△ぶくく賣△もごり賣△神の折
敷賣△かやちちぐ賣△楪賣△志

賣△穂長賣△葉竹△餅松賣
△かさり菓賣△神の血賣

哥 市にゆくさふもむるこゆの
いとくははるのいとけさる人 久定

狂 市の市をきれいよけさるなり
いってり人のらに市よは 了海

餅搗 △餅花△餅むし△餅搗
△言むし△長壽れ柱餅

○正月祝と餅を年内つきを新しき
筵に載ねくちりの餅花を六小に

餅を柳の枝に数多つけくえまの
かたの底かたの賃搗といふ繁華

の市中よハ金禮并白と持て人の家
に来り一白搗賃何いとも賃を取て

搗をいふ三四十年前よりいふなり

○柱餅といふ肥前の長崎とて年の
ふれの餅搗は終りの一白を柱巻餅

置正月十五日東主の火にて焼く食ふを

能降つての音を養ふ如く以て支考
降つて我らに下つた如く来川

狂 傷気の入り口の中より海つぎ
つぎもらぬを喰やう 貞柳

年忌 年の暮に親類朋友互に酒
宴をなすをいふなり 唐土小

此事あり名づけし 發散又ハ別歳
といふなり 東坡集にも出たり

非 人ふ家と云せく我の志芭蕉
魚好ハ死ねといふなり 支考

狂 年忌のいふしつゝ言のまや
思ひ出してはつゝの森 甘露

寒聲 △寒声つゝ△寒彈の端
前ハ調ふ者寒風小向

修行の三線を執首古す
者寒中に外より修行と

非 空を我の心と云ふ二三遍 天夢
空を我の心と云ふ二三遍 天夢

寒垢離 修験者の類寒中に
水を浴び身をくらし

て神に祈るこれ火伏をくついで
家々水水を浴びせし錢を與る

もろく又信心の人と云ふ願して
もろく又信心の人と云ふ願して

非 空を我の心と云ふ二三遍 天夢
空を我の心と云ふ二三遍 天夢

寒念佛 寒后難の身を
修すも同く夜を修

非 空を我の心と云ふ二三遍 天夢
空を我の心と云ふ二三遍 天夢

臘 臘日 増臘 △嘉平 △清祀
唐土の四時 臘日あり十二月

の狩を臘といふ臘ハ臘といふ義
臘して獸を捕て先祖を祭又百神

を祭るをいふなり冬至の後廿三乃
戌日為臘百神を祭る漢の世ハ戌

日を以てと魏ハ辰日を用ひ晋
ハ丑日を用ひ説文ハ大寒ハ近

き辰日を用ひ此祭ハ夏の世に
ハ嘉平といふ殷の世ハ清祀と

を祭るをいふなり冬至の後廿三乃
戌日為臘百神を祭る漢の世ハ戌

○周ハ大蜡トシ漢ハ臘トシ風俗通の禮傳ハ出ル臘ハ先祖ト祭ス蜡ハ百神ヲ祭ス同日ニ祭ス異ニ玉燭定典ハ出ル按ズ社ノ日ノ祭ハ類シテ社ノ日ノ祭ハ民ノ行ハ所ニ臘ハ上一人下万民至ス先祖ヲ祭ス又諸神ヲ祭ス巨大酒宴を行祝ス事本朝の祭ハ如ク之トナルベシ

○本朝ハ十二月朔日ニ祝シテ食ス餅ヲ川ハ餅トシテ此ノ風俗ハ季冬ハ水ノ終ニ辰ノ日ハ土レ位ニ水ト祭ス故小川いハ之ト據アリ風俗考小生

○哥ハ冬ノ狩ト六日ハ古ノ習俗ト皆モ之トをま事トナルベシ

臘ハ日常ニ煖ニ尚ニ今年ハ臘ハ凍ニ全ク消ス臘日ニハ氷モノコラスキエタク侵ス凌ス雪色還ル菅草

香ラシイテハ漏レ世ハ春光ハ有リ柳條春萱野モハエ蜜チヲチヲト見セスニ縦ニ酒欲謀良夜ヤナキノエケシヤニ

醉モフサニ酒ヲニテオモシ還家初散紫宸朝朝度カラ家ハ三トツククク口暗面藥隨恩澤澤回ニツククスリト下ヲ拜領翠管銀器下スルニテ君イメグミヤニ

九霄阿ヲイフエヤシロカキノサマツモモノニテ拜領モノシヤニヨフテシカラノヤウニオモフ

詩五字對句同上

宴禮非迎氣獵獸逢良日今日ハ酒宴ノ禮義モトシカリ出トツタニタモ陽氣ヲ迎ルテハナヤトハヨキ日ニマツテシヤニ

司神為報功吹雨屬令辰冬ヲ名カシカニマツテフエキウタカクフニミモセテサルノニシヤニキ日ニヨツテシヤ

臘ハ農ノ事也漢書ハ季冬ノ月農人ノ事也百姓ナトラテキニシトス

酒サカナ等ヲ賜フテ天皇臘アリテ天地入ヲ祭ルノ意ナリ

時令 此部ハ十二月一ヶ月の時候ニカケルモノヲ記シ

寒 寒ノ入リ寒ノ入リノ意ナリ 食ハ寒氣ノ入リノ意ナリ

奇 肌ノ入リ寒ノ入リノ意ナリ 食ハ寒氣ノ入リノ意ナリ

能 能カラ能モ空也ノ意ナリ 中ニ焦人多ク急ナルノ意ナリ 吐雲

狂 狂ノ意ナリ 度々ノ意ナリ 吐雲

詩 寒夜 宋張耒

寒夜客來茶當酒 客が來タレバ茶ヲ當テ酒ニシテ飲マシメ

竹鹽湯沸火初紅 竹ノ鹽湯ヲ沸カセテ火初メ紅ク

窓前月 窓ノ前ニ月 纔有 纔有

梅花便不同 梅花ノ便ニテ同クバカノ月カケガ子トナカフテオモシロイ

詩 寒五字對句 同上

急景流如箭 童子愁水硯 短イ目カケテナガレテ 行コト矢キウニハヤイ

淒風利似刀 佳人苦膠盃 淒イ風ノ利キトクニハヤイ 佳人ノ苦キトクニハヤイ

詩 寒七字對句 詩礎

苦寒水合分流水 衣狐裘 苦イ寒ノ水ト合テ分ル水トシテ流水トシテ 衣ハ狐ノ裘トシテ

欲雪雲垂四面山 紙窓寒 欲シテ雪トシテ雲垂テ四面ノ山トシテ 紙窓ハ寒トシテ

寒 肉陣 女ヲ坐ノ何ニアツメ

團居セシメテ寒ヲフセグ 團居セシメテ寒ヲフセグ

列セシムコレヲ遮風肉陣トイフ 開天遺事ニ出タリ

鶴語

晉ノ大康三年冬寒甚シ南州ノ人ニツノ鶴ヲ見

ル鶴識テ曰ク今年ノ寒氣ハ堯帝ノ崩セン年ノ寒ニ劣ラズ音書ニ出

寒氣見舞文

時維栗列寒威侵人

未審動止佳勝不佞

庸劣依舊無煩軫念

聊裁寸楮奉候

同 書替之文

天寒氣縮烈寒凜々洞陰奇

寒冑骨毛履况清福眠食

清寒皴生小子吾儕陋生

久不聆清誨義可奉問反
賜高教慰問愚老之榮枯
深感至情伏審雅履万福
寒甚自玉是祈

年内立春

冬の春△年の内は春

除日立春

十二月晦日と除日と云

家集

初年の意は

連心は春や一粒の初は昌叱

狂何日にかももえもえ

歳暮

△年は舞の奇の詞よく
季に用ゆるものハ次の條

△印をまらぬ。十二月廿日 頌よ
△廿日まらぬを歳暮といふ。歳暮
の賀といひく親類朋友互に物
を送り合ふ無事の終年と

よろこびくあり唐まらぬ此事の
△東坡の詩よも見へり。△年の末
を歳暮又△年の尾と云ふ。△深き
譯あり。歳時記。歳暮の妻一。面白きもの

△哥 万葉三巻のたぎらぬはれも梅
の花君よ。△はれはれ入るもまらぬ
古今一。△年ふつて年の言ぬる時に
てう後よおまらぬねも。△年を

後撰 可なりあると。△年ふつて
らうく。△年をとりりくまらぬ。△年
拾遺 可きつめるおのら年をまらぬ
△年をまらぬと。△年をまらぬ

金兼 入初れをまらぬ。△年ふつて
るふは。△年をまらぬ。△年をまらぬ
新勅撰 可なりあると。△年をまらぬ
△年をまらぬ。△年をまらぬ

柏玉 河歳暮
△年ふつて川のさふたて。△年を
まらぬ。△年をまらぬ。△年をまらぬ

雪玉 家々歳暮
△年ふつて家々。△年をまらぬ。△年を
まらぬ。△年をまらぬ。△年をまらぬ

同 山家歳暮
△年ふつて山家。△年をまらぬ。△年を
まらぬ。△年をまらぬ。△年をまらぬ

△詞 △年の名物 △年の別 △年の花
△年をまらぬ。△年をまらぬ。△年を
まらぬ。△年をまらぬ。△年をまらぬ

△年の果 △年をまらぬ。△年をまらぬ。
△年をまらぬ。△年をまらぬ。△年を
まらぬ。△年をまらぬ。△年をまらぬ

△年をまらぬ。△年をまらぬ。△年を
まらぬ。△年をまらぬ。△年をまらぬ
△年をまらぬ。△年をまらぬ。△年を
まらぬ。△年をまらぬ。△年をまらぬ

詩 歲暮對句

同上

看雪何妨醉 傷懷殘臘去

尋春即有期 屈指早春來

詩 同七字對句 詩楚

歲暮陰陽催 短景冬欲半

天將霜雪際 寒霄歲又殘

歲暮之 白駒過隙忽逼改

歲誰可脫世 紛況於足下

公私之忙乎 幸偷閑責臨

命小酌以遣鬱悶 呵々

歲暮之狀 歲華荏苒一年將

盡。歲華驚換。人皆奔忙

四方況於吾子 屢紛擾乎

狂顧舉不而少 逐風塵

草木 此部也十二月一ヶ月の

冬梅 梅春の物也一年の内

哥六帖 六帖の梅の句あり

千載 山もこの梅の梅の句あり

排 能根なる終焉也

連 能根なる終焉也

早咲梅

△早梅△寒梅いづきも
早く咲たる梅をいふ

早梅ハ十月前冬至前ハ花開くと

梅譜ニ出り△寒梅ハ香あり九月

花開くと花譜ニ出寒梅と十月の

季ニ出しし俳書もこれにも俳ハ

十月の梅ハついで咲くもこれ

も十二月より可なりん

哥 柏玉

後柏原院

あけのぼるあけのぼるあけのぼる
あけのぼるあけのぼるあけのぼる

連 雪小のほほせとや人梅の花宗祇

梅ハけふあけのぼるあけのぼる 肖柏

俳 早咲や梅一やふ梅花 支考

早梅や梅の里ハ雲を友 蕪村

詩 寒梅

戎昱

一樹寒梅白玉條 一木ノカ
ニパイガ

シラタマノエタノ 迥臨村野傍

ハウニミゴトナ 溪橋

トホク村ヤ野ニサシカ、ツテ根
モトハタニガクハシニツラアル

不知近水花先發 水ギハニ近フ
テハナリハヤ

クサイタノ 疑是經春雪 殊消

ラシラフム 春ヲヘテモキヘメ去年ノ
ユキノ残ツタカトオモフ

臘梅 常の梅の花ハあけのぼる
花の形狗蠅ニ似たり

故ニ別名狗蠅梅ともいふ色黄

チリ香甚し故ニ檀香梅とも

いふ又色にゆるげ淡黄梅とも

りあざり本朝ハ後水尾帝の

御宇ハ姑く朝簾より貢げ

○梅ニ似く梅ニあざりと活法ニ出

詩 臘梅詞

輕盈半度縷金囊 不

似西施粉態粧 一ツサリ

カタノハナデキニシテクンタフクロノヤ

ウナニヨツテ百施トイフ美人ノケハヒ

ダテクスガタ 爲是來從真蠟

ヨリハヨイ 國幾人爭號小黃香 八ナ

ハモト真臘國トイフトホヒクニカラ来
タハナジヤニヨツテオホクノヒトガツ
レイチトシヤウヒシテ小
黄香トイフ名ラツケタ

詩 五字對句

同上

花裏重々葉

不施干点白

ハナノチカニオホクノ

オビタ、シノシロイハ
ナハサカ子ドモ

枝頭點々春

別作一家春

エダノサキニチラノト

冬ノ未ニワシヒトリノ
春ヲミセル

探梅

冬の未小梅をたのぬ
ゆきくさくさ

能 手をと探し梅の家をたのむ

寒竹子

孟宗竹。薩州小生
竹冬笋生ば小

くして味美なり。鳳尾竹といへ
る竹ふる冬笋生ばれも細く

して喰ふべし。三才園會より出
。冬の笋は孟宗と名づくる

事ハ唐土呉の國に孟宗と
いへる者あり。母孝あり

母竹は好む。雪の中、小竹の
林へ行くと、母孝と感ずる

冬をまじむ。笋生ばる。則取
りて母を供じるといふ。母孝より出

今ハ竹は根小。春は早春。笋は
能 孟宗竹の事。竹の生る。負風

生類

此部ハ十二月一月
の生類をとりむ

目鰻取

北國。ふかしの海。厚水汁

下子かき。火をくわ。水を破り
て其穴より取りたり

妙薬。小兒の痲。又ハ省目と云
。春夏よりハ。寒く取る

能 目鰻取の事。其の富。由山

寒鯉取

箕輪田。常州。水
の流る。流る

能 寒鯉取の事。其の味。美し

鶉巢とふ△雞乳 二二三子差

必用 此部小十二月子月の 要用の事とまらぬ

| | | | | | |
|---|-----|-----|-----|-----|-----|
| 破 | 夜九ツ | 辰ノ方 | 夜ハツ | 巳ノ方 | 夜セツ |
| 軍 | 朝六ツ | 午ノ方 | 朝五ツ | 申ノ方 | 朝四ツ |
| 向 | 昼九ツ | 酉ノ方 | 昼八ツ | 戌ノ方 | 昼七ツ |
| 方 | 暮六ツ | 子ノ方 | 夜五ツ | 丑ノ方 | 夜四ツ |

日刻 事とまらぬ小用内へくは 子日世百。子刻世ノ刻

方角 此月家普請他行西の方角 吉天道西小行く也

樂事 此月四時の末にいぬと 得る折なれはとまらぬ

きぬぐりたりたりとふもくいと ぎ皆春待心よりたれは祝ひ ぬどちなく或はなまらぬの 庄園小梅開くわくと聞えい

策小 新筆とりそへ行は即 畫中の人小似たり其雅趣は

はうりま 夫茶室炉辺の奥尚 閑人の時と得たりといふべし

衣服式 枯色梅 五節女 紅糸 同單

白き上着 椿衣 面蕪芳裏赤 五節季より後

小用る 脂燭色衣 ぬき紅 事も有 たる紫

生華式正 寒梅水仙寒菊 寒牡丹 寒百合

天氣占候 此月此紫の雲たて 大風なり赤雲ハ

こまひあり。成亥の雲ハ風多 此月八雨のほち風を生と東

南のらせハ久く吹む。虹あ きハ人民わづらふ虹むく

きハ大豆のりも高し米も高し 霧あきハ来年五穀より来年

冷る霧多々れ来年早ゆ
榴噺。上中旬雪ふれ来年

梅雨の中雨やう。寒中小雷の事
米の價高し。又来年秋洪水あり

養生 孫真人曰此月ハ甘き
減し苦きを増し心は

補ひ肺を調り
寒中に天門冬茯苓細末し

酒又ハ水あぐ服とべ多く用
れハ薄着よく能く寒を志の

右の外養生の法委く延寿養生
論を出さる大に益あり見よ

屠蘓方 白朮 桂 各末 防風 一合
菴藜 赤 蜀椒 桔梗 各末

大黃 赤 烏頭 五片 赤小豆 十粒
右の茶と三角の紅の袋子入除夜お井の底

ふうけて元日取出し酒あけて吞
まらば其外一切の邪氣とさる

○時珍が白蘓ハ魁氣の名此菜切の
鬼夾を屠割らる故名づくとも

右の外包す本式茶方諸医の論
悉く丸散手引草小委し見よ

○長生仕様傳といふ本ハ平らな小本
一冊うら人間長寿を得の法妙茶

秘傳といふ小兒誕生うらそと秘
産前産後心得土生うら子ハ短

命なりといふ長長寿せしむ術
其外一生の間養生の志やうといふ

飲食 此部ハ八入カみて養生し
る食物をあけむ

鯛味噌 生鯛の腸骨を去り
身むくり味噌小和し

よきうらん煮爛し泥のいごと
○細味子や時整は振おん 兒十

煮凝 何魚も油ゆき魚を煮
て一夜越れば煮汁氷を

凝豆腐 氷もちハ水おつけ置
てせばもとの餅よらる

○非 こんやあやふいよ入ておたり 秋光

狂 不ニのまほろ日われど歩降
と存ぬら一まほろいん隆峯

寒曝 餅米を製する非寒曝
み代はつたの内 其角

寒餅 寒中製する餅はかい
出る事なく味も美し

狂 狂の候まをうもわつくと
乳のもらちうてうびぬつき合 左方

寒造酒 非酒を造る非酒造り
白面

狂 狂の候まをうもわつくと
これと君をたはるう有る 松雨

藥食 鳥獸の肉其外陽物は
食して寒をふくむ

非 羊の肉好合点のわるい 野水
まらひ候のきしひまらひ 李右

鹿膏 此項専ら鹿の肉を煮く
膏之冬此肉を喰へ内を補

非 鹿膏や踏らけてはくまの市交矣
い気まう一血脈を通して大益育

十二月飲食 並料理献立

禁 葷肉の猪猪肉の霜ふ非
物 きのうる菓菜と食ふ事な

○牛肉と食へ神と破る
うき○韭と多く食ふべし

好 芋頭今月食ふべし他
物 月々六病と生ど

料理 汁 たのび 陸より
よめふ 丸むさうど

けしき 今月食ふべし
木のこ 今月食ふべし

つとむ 今月食ふべし
つとむ 今月食ふべし

清汁 長い がん
こま さんせい粉

鴨 生り 鴨
水豆 鴨

魚貝まつち 鴨
木くま 鴨

さより。塩引き
大らん。うど
かき。うど
生あがり
今げ。大らん
長守

差味
生綱角切
生綱角切
こい
空さけ

ふま。けり男
ふた。かかん
ふり。まき
きす。うど
ご。うど
い。うど
今のま

れ。白。轉り
た。ん。う。大らん
さ。ま。い。は。ま
焼。角。い。う
今。の。ま

煮物
きん。こ。き。う。男
ま。あ。か。い。本。房
ま。ま。ま。う
鴨
い。ん。ま

たい。ん。が
た。り。ご。う
た。ま
あ。ち。火。ま。つ。か。せん
い。た。ま。ま。ま
生。綱。角。切

白。う。か。や
く。の。あ。ん
ま。の。こ
一。塩。種
生。綱。角。切

和會物
生。が。い。角。切
ま。ま。ま。ま
串。う。い
ま。あ。い

鳥賊
生。あ。い。び
ま。ま。ま。ま
う。う。げ
ま。ま。ま。ま

ら。ま。ま。び
ら。う。ご。う。げ
赤。い。一
み。う。ご
ま。た。ま。ま

吸物
か。こ
生。麻。子
ま。ま。の。ま

か。こ
ま。ま。ま。ま
鴨
ま。ま。ま
か。ま
つ。ま。ま。ま
こ。ま。ま

精汁
ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま
あ。い。え。ま
た。ま。ま。ま

ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま

は。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま

清汁
ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま
小。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま

膾
ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま

差味
ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま

ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま

ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま

煮物

皮本房 漬竹子 煮物

やわらかく煮る

和會物

煮物

あじさいよく

煮豆

ゆりね

時鳥

ひよろし ぼんぼり かしら

魚

ほろろ ぶり かしら せんぼり

かき たら ぶり せんぼり

あじさい よく せんぼり

青物

きんぎょ せんぼり

せんぼり ぶり かしら

せんぼり ぶり かしら

三冬之部目錄

△印あるは前より季ふ用ひききるをまゝ

時令之部

△冬風

冬

△冬霧

冬

冬

△冬月

冬

冬

△山眠る

冬

冬

△冬曉

冬

冬

△さびし

冬

冬

△はやく

冬

冬

△雪山

冬

冬

△粉雪

冬

冬

△雪つと

冬

冬

△雪空

冬

冬

△雪消

冬

冬

△雪中

冬

冬

| | | | | | | | | | | | | | |
|------------|-------|-----|------|------|-------|-----|-------|-------|----|------|-----|-----|-----|
| △大鷹狩 鷹狩 | △狩場雉 | △カ草 | △ぬす立 | △鷹鳥匠 | △鳥叫 | △千鳥 | △友に千鳥 | △鴛鴦の食 | △鳥 | △水鳥 | △鳩 | △鱈 | △蛎 |
| △大鷹狩 鷹狩 | △狩場雉 | △カ草 | △ぬす立 | △鷹鳥匠 | △鳥叫 | △千鳥 | △友に千鳥 | △鴛鴦の食 | △鳥 | △水鳥 | △鳩 | △鱈 | △蛎 |
| △追鳥狩 | △鳥の落草 | △教草 | △鳥立慕 | △列車繩 | △鷹犬狩技 | △千鳥 | △鴛鴦 | △鴛鴦の首 | △鳥 | △浮寐鳥 | △木兔 | △雲腸 | △蛎舟 |
| 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 |

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|------|-----|------|------|-------|-------|-----|------|------|-------|------|
| △鯨 | △鮫 | △夜更引 | △竹筍 | △河豚 | △海鼠腸 | △必用之部 | △飲食之部 | △蒸漬 | △雞卵酒 | △杉焼 | △納豆汁 | △蕎麦湯 |
| △鯨 | △鮫 | △夜更引 | △竹筍 | △河豚 | △海鼠腸 | △必用之部 | △飲食之部 | △蒸漬 | △雞卵酒 | △杉焼 | △納豆汁 | △蕎麦湯 |
| △水魚 | △網代 | △柴漬 | △潤眼 | △生海鼠 | △鮪 | △切干 | △生薑酒 | △鍋焼 | △風呂吹 | △抽味噌 | △料理献立 | |
| 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | |

○此書の本文をいろは分りく
 月令以呂波分物目録と題号
 を名づけ別ニ賣出ル中ハ
 季節ニ用ゆるものハ勿論季節に
 用ひたるもの物も非狂の
 便にふる事又八月並ニ艸木魚
 鳥の異名和名古名ハ聲ふまじ
 くりくりは分ふ出ル。本書ハ注
 解のしるし記の又ハ出所の落
 くる物ハ此目録の條下ニ辨明を本
 書ハ二處三處ニありて委ニ誤ハ何
 れハ何れハ何れガ記物此目録ハ見ル
 此の部
 沖津鳥 此の部
 △恋鳥 此の部
 △秋凌 九北下誤ハ春の凌の所ニ此
 部 春凌ニ出 凌の誤ハ此の部
 △水無月 六下誤ハ水無月の出ル所ニ此
 部 水無月ニ出 水無月の出ル所ニ此
 部 水無月ニ出 水無月の出ル所ニ此
 余ニ准して知るべし其外狂・俳
 詩・哥の便にふる事多く載ル故
 此目録をかりても會席などに懐
 中しるし失忘ニ備ふべし

三冬之部

冬の異名和名冬の神等
と十月の初口

時令

此部ハ冬三ヶ月の時候
ふかひる事ハ

冬風

哥ハ
讀又音響ク吹まふ云

占冬南風吹ハ三日間霜多ク寅
考卯の日風ハ其月ハ風多ク

哥 我ヤの楮のまふハ
山のりしをさひころや

排冬の風序送ても音好む野明
溪中ハ波もとわつみの風 蓮二

詩 冬風五字對句

同上

黑帝行威肅 雲岳千岩瘦

飛蕙意氣雄 霜林萬葉飛

カゼラツカサハル神心
イキモスサニシイ
シモノハ林モカセカフケバ
アムタノ木ノハガトビチル

詩 冬風 出自薊北行疾風衝塞起

薊北トイフ所ヲ出テユケバハガシイ風ガ陣ゴヤラフキタヲスヤウニオコリテキタ

沙磧自飛揚牛馬縮如蠶

冬霧 秋の霧ほどふくくは霧を冬のみぎりふとかく水きふふと

哥 冬をうらめてわが涙もどくめさか川よ

詞 知るはけ千も迷ふたえくさむき

狂 狂きうれ目にはゆるも個代も

冬日 黒道として北のくまをゆく

哥 ほととぎすのあはれひままで

詞 ほととぎすげ。ゆるほほまき。よりの

非 々の思人侍舟の楫はくり許六

狂 日かかりあゝこの手のねしき依

詩 冬日五字對句 同上

忽忽短晝光 漸過三竿外

融融浮和氣 初添一線長

詩 冬日詞 白居易

泉泉冬日出照我屋南隅

坐和風入肌膚

トミタル冬ノ日が出テコチ

ノ家ノ南ノスミラテラス

負暄背日

ノドカテ風が分 初似飲醇醪又

如藝者蕪 外融百骸暢中

適一念無 曠然忘所在心與空虛

俱何トナカヒクトヒラカニテ非ルコトモ

冬月唐宮中ノ女ノヌヒ針ノロザヲ以

久至ノ後ハ一日ニ糸一スチツ、多

冬月 枕草帝ノ老のけいふ

たふとふいととどれたものなり

哥 拾遺集 友輔

あゝのおれ此のち乃さやけさ

千載 平實重

夜をかきひきふちのトム

夫木 大納言經信

名跡きよくそてめる嵐

續古今 家隆

たふあついく夜袖より

詞 氷まやると。このえはなる。梢くま

みられ若のまきふ。雪に光り派とる。

俳 襟巻のお湯又々冬月 蒲丈

狂 ころいともくやこの中れる敷い

冬雨 冬の雨をこぼるふ

哥 ふるあのをねきりけをの雲

嵐やそふ吹こほる人 為家

この里を空かきつらうもあに
外山をこれかきつらうもあに
衣笠
非 冬の姿をいふ。四季の山乃
山 姿をいふ。詩あり。次ふ。あに
狂 冬をいふ。詩あり。次ふ。あに
信 徳

山 眠 冬の山の姿をいふ。四季の山乃
姿をいふ。詩あり。次ふ。あに

詩 四季山之詞 卧遊録ニ出

春山 淡治而如笑 春ノ山ハアツサリトシテ
人ノエメルヤウナ

夏山 蒼翠而如滴 夏ノ山ハアツクトシテ
ウルホフヤウナ

秋山 明淨而如粧 秋ノ山ハサツカトシテ
サリタルヤウナ

冬山 慘淡而如眠 冬ノ山ハモノサセシウテ
ツツタコトナリ

右の詩の心を以て季に春ハ山笑ふ
秋ハ山粧冬ハ山眠ると三ツ出して夏の
山滴を季に用ひるも非の掟

寒夜 冬冬の夜。秋の夜ハものさ
ひいさにけりかめる物なれ

これハハやうかろてさむらに
けりかめる冬の夜のさほまり

哥 夫木 為家

おのつ世いづくは人のあ

非 冬をいふ。詩あり。次ふ。あに

狂 冬をいふ。詩あり。次ふ。あに

信 徳

詩 冬夜七字對句 詩礎

起看北平 寒垂地 鴛衾冷

俯听長江 流有聲 獸炭消

詩 冬夜五字對句

曉角催寒漏

孤燈旋落花

アカツキノフエノ音が
サムイトケイヲモヨホシ
ヒトツクトモシヒガヤモ
スレバハナラオトス

冬曉 △さびき朝 非 曉や我つけ
初る栲の多た 荷兮

哥 雪玉 △ねきゆめ はるね凍くなる
暁のおしとて袖ふおれき月うけ

詩 七字對句 詩礎

屋頭木葉 皸寒片 茅店月

セウカクハク カキアタリニムメノハナガホニ 板橋霜

牆角梅花吐暗香

さび空 非 さびを帯ふりて見
しり入影をけ 宙存

さび △さび 非 三日月の一弦と
もーいつく島 支考

凍 △さび 凍ハおる序どふら
しりて寒氣ふこりうまなる

非 氷かみの凍さ下女少影が 猪柳

はめたき 枕書 かつめはははは
出ーなるまじはははは

哥 玉葉 △たまは をわく枝ふも
その月風やさすーもをりうけ

非 ぼろををるふおける 漆地山林

狂 待合のつりさのものを 涙きりけ
あへもさるーいりいり人 悔翁

雪 △ゆき 異 △六花 六出 △六出 飛瓊 滕
六 玉塵 銀樟 六雲英

雪 △ゆき 豊年の瑞 △ゆき 事并 雪女其外霞
そけ奏ーく天地窓問珍とつ本に出れ

哥 古今集 母貫之

山家雪 定家

田家雪 実蔭

外山 △ゆき けりてくまき

柏玉 遠山雪

三卷 附合

冬ノ四

ひらくしらんへんまねおのあね
雪玉 谷雪

雪玉の雪にまをかりて谷の戸に
さる乃梢ちこえんらうとていず

同 川邊雪

氷の上はうまもつりは菟鹿川
こまやちねの雪み及くん

夫木 湖邊雪 為家

内ちやばは山風梅うけく
いしりゆまはく雪の志く雪

風雅 行路雪 ねほく

彌人の先づ門及まのきんたて
ゆきたよりもまよふまうね

夜雪 小井

月の戸れゆきやうとてへつは
つりねる雪のいりうりまて

夫木 名所雪 為家

阿れまきつもの古々をままきと
折もさぬ雪のまやまを

詞 雪のつゆもかきさげ。かきた

もて。らうらる。白め 初雪は月の様

山は 紫人の雪海なる。山はたゆ。嵐の

ねま埋る。 風はたなまぬ。ゆき

きある。氷のうぶりる。風はふさ。雪

げのうせ。雪まうせ。又雪ふ。風のたゆ

る。雪まよひちり。 雪はふ。雪まど

つりぬ。ゆきの雪の埋る。雪ま

たる。雪の雪。雪まうせ。雪の雪

のねまえへまぬ。雪外あ破など白

い。雪の雪。雪まうせ。雪まうせ。

木末 木このね。梅まうせ。梅ま

か。雪まうせ。雪まうせ。梅乃

ちいせの雪海なる。梅まうせ。梅

りぬ。雪まうせ。雪まうせ。梅ま

梅まうせ。雪まうせ。雪まうせ。

梅まうせ。雪まうせ。雪まうせ。

梅まうせ。雪まうせ。雪まうせ。

梅まうせ。雪まうせ。雪まうせ。

梅まうせ。雪まうせ。雪まうせ。

連 朔きよきそらにまする物くれ豊通
世々よるやその山のもれ声 紹巴

非 我きとありの峰の雪の上其角
市人ふいてこれいふ人そのま 芭蕉

雪の川切り井や新巻の湯 宗南
ふおとんとておまほとまはるは 徳元

摩 雪をきにほひの雪の如地へ 支考
煙火ささるれ風ありおのてる 蓼太

狂 雪はふるふとて帽まにちるふと
かゝる雪をいれたいの山 宗増

ふとてやちり雪やうまきぬ白妙ハ
ひとつらねなる天地ありあり 貞徳

ころしやとてふとてふとての句いあまど
ぬるがうたをる物まをるう 貞柳

詩 雪五字對句 同上

天地無塵事 如舞時飄袖
天三地ニキガフレバニ
レノチリモナ

江河有篆文 欺梅併壓枝
江ニ河ニモニキガフレバニ
ヤツレレガミハ

拂樹驚梅早 尖峯排玉筍
ホフハラフアハハヤサキ
ムメカトオトロキ

凝陞類月殘 圓石疊銀盤
コリカキニリイモツキヨシ
フミタニニカドツテアル

詩 雪七字對句 詩礎

三千世界銀成色 犯長沙
サンセカイノチコカ子ノイロ
ニナリ

十二樓頭玉作層 没樵路
シウニロウノウタニオカ子
ゲタヤウナ

看來天地不知夜 梅花信
ミキタルテニチズシラヨラ
カウミレハ天地ノアヒタニ夜

飛入園林總是春 柳絮風
トビエハニハヤンニイレバ
トハシラスデアアラフ

雪 瓊林玉樹冷艷寒光
雪ノ 瓊林 玉樹 冷艷 寒光

呈瑞 散銀盃 花意思 鋪作月
呈瑞 散銀盃 花意思 鋪作月

詩 雪七字對句 詩礎

雪 瓊林玉樹冷艷寒光

呈瑞 散銀盃 花意思 鋪作月

詩 雪七字對句 詩礎

唐祖詠

終南陰嶺秀積雪浮雲出端

終南山ノ三子ガタカフニレバツモツタユキモク

モノハシニウイテアルヤウナ

林表明霽色城中增暮寒

林ノエニハレタルナシキガアキラカトオモハシ

ロノウキニハ日クレノサハサガマサツタ

同 柳宗元

千山鳥飛絕萬徑人踪滅

山ノユキニトリノカヨヒモニヘスイツタノ

ミチモユキニウモレテヒトコトモナイ

孤舟蓑笠翁獨釣寒江雪

ヒトツノフ子ニニカサキタキナガウテヒトリサムイ

江ノユキダシキヲオモシロカツテウラウツリテ井ル

雪日本 香爐峯雪

雪れふくふりた

はちちく出せまひてかろえを

のありさぬいづらんとおほせられ

多れば御前よ在る清少納言こと

むはちして御簾と巻上りり帝

ことの外感たせせうととるこれ

次ふちうけ詩の心を合せうり

朗詠集 白樂天

遺愛寺鐘歌枕聽香爐峯

雪撥簾看

雪山

排

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

いとよくふしむ物ふらうるる

⑩ 市子や此月の日を腕の綱 東窓

粉雪 ほまぐく草ふらぐ粉雪
丹波の粉雪とりやま雪ハ

よねとつきふらひふらに似るはひふ
なり溜りぬれとひふを丹波とるを

鳥羽院種くたてきりて雪のふ
るふかく仰られと讃岐貞待日記よ出

⑪ 山風や雪の粉まきさかひ兵卿
お鬼棒とうて粉雪とふするを香

雪唐 柳絮 謝太傳安トイフ人兒
女ヲ内ニアラマテ文ヲ講

論ス俄ニ雪フルヨツテ兄ノ子朗トイ
ヘルニ問テ曰白雪紛々何ニ方似タル

朗答テ空中ヨリ溢ラフラスカゴトシ
トイヘリ又兄ノ女ニ問フ答テ曰柳

絮ノ風ニヨツテ起散如シ安モ奇
オヲ賞シテ悦フ世説新語ニ出

⑫ 多き雪これふけても地争ハ連国
花と起風風り雪の柳ハ素仲

カムキヲ 蕪武單于ニ使ス單于ト
ラヘテ北海ノ上ニオク食ニ

之シ附ナガラ雪ト毡毛トヲ齧
テ數日不死遂ニ漢ニ歸ル

放馬 齊国ノ管仲旅中雪ヲ
カキニアフテ道ヲ失フ其

時老馬ヲ放テ行クニ任ヒテ隨ヒ
行バ遂ニ道ヲアヤニラストカヤ

雪花 △六花。天上ニ瑞木アリ雪
ヲアツメテ瑞木ノ花トス

△六の花といふ。草花の花ハ皆五出
なり雪の之独り六出有月令廣義出

⑬ 馬の尾小雪の花と山崎支考
雪の尾ハ枝也スツ六ツのこふは文洞

去ばら雪 木の葉ちどにひりり
たふ雪のさちくと

⑭ 能くおきなをこそるふつを荷風
雪肌 世間養人と賞とら言葉

まじらふと雪をわけてはるる

語下事ハ随分季と云ふべしこれ
らの事うつら衣らぬ例もあり

雪空

雪催い。雪気(非)音えり
同くしの耳ふ都之一品

菊と雪とハうハ替るの冬梅五

奇

為相

月少きおける雪に影めり
月少きけのえろをけき

雪聲

雪の音をいり

非 足ハ短小表表り舌の声 嵐雪

詩 雪聲詞

石泉凍合竹無風夜色沉

沉萬境空

イシノイヅニモコホリガ
ハリワメテダケニカヒノオトモ

試向靜中

閑側耳隔窓撩乱撲春蟲

フトモノシヅクナウチニ耳ヲバダテキケ
ハニドヲヘダテハラクト春ノコロムシガヤ
ウシニアタルヤウチオトカスルユハ
アケテミタレバユキガフルニアツタ

雪消

昔ハ雪多ク多ク時小拵
餅并菓物を互不相饋る

これを雪けしといふ長を喰ふて
寒をわさるといふこと(目並記事出)

富士雪

富士ハ四時雪あり由ハ
御傘ハ雑といふ又通俗

志連奇あさやけ等ハ冬といふ此
事大ニ論あり委く補遺不出

雪中之文

朝來六花呈瑞彌望為一

色之瓊瑤來歲之豊可知

矣差拙畏寒徒做表安閑

門擁炉唯仰神仙來賞之而已

○言登ハ寒氣。歳暮の條見合と

妙 寒中の雪水を貯へつ終よ

茶 用也れハ一切の熱毒を解を

雪中夜寒手足をぬ法。胡
椒をニツ割りろくろくい

尺ノス左右ノ人是ヲ妬テ讒言ス主怒テ祈ヲ撤中ニハル祈天ヲ仰テ罪ナキヨシヲ哭ス夏ナレト

鐘聲

唐ノ靈山ト云ル所ノ鐘ハ霜ノ聲自ラ鳴ルト山海經ニ出

霜柱

寒ツルニ谷ウケテ陰地ノ野辺ニ立ル土高

能ヲわさ(も)から柱と幸の神 金波

哥 夫木(公)ふさぎをふらさるる霜

霜花

霜濃ク屋上ノ霜花ニシテ皆百花ノ状アリ

霜ノ花ノ水ノ花ノ轉音トモイフ雪

霜水

霜ノ次弟ナリ

霜夜

霜ノ夜ノ言

古今同クハふまハくおねまのそのまやくまよとこころひとぬる

はたき霜

霜ノ夫木 公實

霜ノうは毛もいろふさあらん

氷

厚氷 氷花 氷衣 薄氷 氷面鏡 氷の和訓

みハ氷のそりしる面が鏡のやうに見ゆる故に名づく

花と見る 氷の衣ハ池川

氷のつげしよとのわたりをなご

池あや氷くらん河

氷のちりけみくこころ

月のひらけみくこころ

續古今 谷氷 為尹

同くそんたるるをせはるる水の
ゆくもわくわくあるころる

新勅撰 湖邊氷 内大臣

三つたうや水のうとゆくふねの
波もるあつたよるるるん

柏玉 葦間氷

目玉とへくおつさぬるけより
あーの下もふも波ふらあき

夫木 薄氷 小侍後

けさーもるるは「葦」のけも
野まのむくさるあーく

詞よとてある。山嵐おる。おもりの後
△はあ△うま△い△き△お△る△の△か△ら△

入江。山陰。おの袖。潮代。音あ
たき。山川。ふー空。波のたけ。お

さお。氷の面。お結ふ。けのお。おも
舟もるる。うはある。波さく。と

ーの羽風。ひとさるる。

連一とせとるるおのかい。宗祇

能 凍い氷をまけなもあさ 白羽
あふ間すあはいと絶のゆふ 正秀

野よりて水まそあむおぬ 嵐雪
凍福やむの中いさり 松 其角

狂 水もの上も氷のさうにさう
いらのあつたもさうさう 目吉 入安

所より上流よ結いさうにさう
あつたもさうさうの取もあやじ 十慶

詩 氷七字 對句 詩礎

寒生玉指 紅先透 寒侵玉
さるさか玉のやうに指 三つたうて水

光 遂金刀翠欲消 冷浮銀
光ハコガネノハモノヤウテ水カハリツテ

氷ノ 孤聽 河水氷ル時 孤是ヲ渡此
後人モ氷ノ上ヲ行ト 述証記

○本朝信州諏訪湖モ氷厚クシテ人
馬氷ノ上ヲ往來ス先ッ 孤未テ渡初ル

ヲ見テ人モ行キ通フニ春氷解ベキ前
ニ孤歸ルニ是ヨリ人モ不渡トイフ

氷聲 氷をこく声なり 氷はくじとて氷をこくはくじ

又舟をこすはくじ 櫂はくじとて此音をこくはくじ

楊延秀 揮子 敲氷 文日

釋子 金盤 照曉 氷 彩 絲 穿

取當 銀 鉦 敲 成 玉 磬 穿 林

響 忽 作 玻 璃 碎 地 聲

露 結 び 霜 結 び 霜 結 び

鐘 氷 氷 結 び 霜 結 び

氷の 轄 氷 解 る 水 氷 解 る 水

冬 混 雜 此 部 小 日 令 時 令 草 木 令

炭 別 名 烏 銀 種 類 切 炭 池 田 炭 炭 頭 炭 輪 炭 炭 團

右の外種類ハ次ニ記シ今攝州池田の邊小くやくりの池田炭又切炭

といふ日本諸州の茶人といふ此ところの炭を用白くぬ木と

やくといはくぬぎ炭ともいふ

輪炭ハ池田炭の大成物を薄く切たり形車の如し故に名づく

炭頭ハ炭の俵一俵の内小十と十

五ト大わりのあるをいふ

炭團ハ炭を拾て丸くする物

炭竈 炭焼 小野炭 和奇 山山城

山山城をいふ同はく山常陸な

はく山山城をいふ同はく山常陸な

はく山山城をいふ同はく山常陸な

はく山山城をいふ同はく山常陸な

はく山山城をいふ同はく山常陸な

はく山山城をいふ同はく山常陸な

はく山山城をいふ同はく山常陸な

はく山山城をいふ同はく山常陸な

はく山山城をいふ同はく山常陸な

はく山山城をいふ同はく山常陸な

○炭がまハ山のうきそに宛とほりうかまを
ぬり薪を多し入まきく炭も焼く
◎拾遺集 洞山志と好まむふ獲つ
ふんくまむとさふ小町の炭の由 好忠
夫木(お)うれの炭もき永えれぬとて
人とはへのたのむりのうハ おれく
詞花 山(お)うやく炭の由の物(お)らう
やうくまむの(お)らう 匠房
金葉 洞山志と好まむふ獲つ
まむの(お)らうの(お)らう 師時
新京今 洞教(お)らうの(お)らうの(お)らう
らうの(お)らうの(お)らうの(お)らう
◎詞 こと木。すまき。たうらうらうらう
ことまの山。木の(お)らう。まむく
たうらうらうらう。ことらふらう。けら
ふきく一風。炭も衣。炭も衣。炭も衣。
○たうらうの(お)らうの(お)らうの(お)らう
又(お)らうの(お)らうの(お)らうの(お)らう
奉ハ(お)らうの(お)らうの(お)らうの(お)らう
◎俳 炭やきの(お)らうの(お)らうの(お)らう

炭屋の山陰も炭とらう 忠恕
天糸の炭ハ女房も世話をやき 秀信
◎狂 白妙の(お)らうの(お)らうの(お)らう
たうらうの(お)らうの(お)らうの(お)らう
家卿

詩 炭詞

東坡

豈料山中有遺寶

山中ニコヤチ

磊落如駮萬車炭

流膏迸

乳無人知

陳二清風自吹散

根苗一發浩无

際

舞千人看

投風潑水愈光明

燦玉流金是精

悍

火ニラコツチカラ人玉ヲモトロカシカ子ヲ

モナガスホトナイキホヒモアルモノゾヤ

炭之 胡桃炭 唐宋世ニハ炉ノ炭ニ
改率 光ニテ用フルヲ上トス

獸炭 唐ノ年琇ト云ル人炭ヲ獸
形ニ作り酒ヲマタムトカヤ

楮 製法ハ炭十斤鉄屑十斤合ヒ搗テ
糯米ニテ子リ乾テ用ル時ハ火キエズ

楮 其上火△骨蒸炭△の如クハ
株杭ノ木の根を灰の中ニ置キ

其上火を△自然ニ火△
マシク山中ニ埋火の用ト長哥

おもむく△火△
○非 登ニ百歳の祖又ヤカシ炭左東

廻炭 煨中ノ炭△心む替古のたを
けいもろろの置る炭を

○非 二の程のものを△
あげく客人おひく△置る炭を

白炭 花炭△枝炭△多くハ
燭の木をややく灰中ニ埋

○非 白炭やまのうらるる枝 二柳
このまは白く△枝の形ある魚枝
炭ともいふ○河州北の瀧ややく

花炭も同所より出或ハ梅の花も
ふやれ竹の葉ともふ存以名品

○非 白炭やまのうらるる枝 二柳
賣炭翁 △炭賣人△
樹のほれ鼻を△其角

詩 賣炭翁詞 東坡
積火變深黑△火ニ上レバ
齒忽怒 △牙ヤ角△セウニツタ火ノ

炭斗 一名烏府。炭入る器
△又ハ籠△といろくほ

助炭 助炭ハ炭をたごころとて
△の如く△の

爐 冊炉裏△地炉。炉ハ今茶人
の用るハ方一尺四寸△。山家の

もの又寒國のものハ其製大昔
堂上△のり△其製大

埋火 △炉火△哥小炉火の題大埋
火と詠△。又△の詠前出

哥 夫木△山竹の△△合せ埋じ火の
り△も△て世△も△

後成

シヨクニラニシキ 燕寝覆時筆翡翠合
ガハキタツコウチ 歡擁處效鴛鴦

カブレハヒスイトイ
フトリノモヤウモコモツテアリ婦人ツイダクト

キウキキレハモヤウクヲミドリノ子ヲスルヤウチ
蒲團 婦人の徳を或

しるのりより木綿ハ近世の事
非 婦人の徳を或

狂 婦人の徳を或

紙衣 老人の著てかろくてよく風

非 婦人の徳を或

頭巾 丸頭巾△角づきん。法樂づ

の丸くくくくくを帽といふ漆

くの時服をたふふふふ頭巾二枚

日本ノ人ハ頭巾を着く人達
事を無礼とい

非 袴とハ袴かつらう襦袢支考

足袋 堂上より四季も小召は

種 皮足袋。刺足袋。木綿足袋

狂 我々のあまもやそ革もびや

綿 綿打△綿撮△進綿△唐綿

束綿 △綿つむ△臂綿。右づはほ

綿帽子 婦人の頭巾△婦人頭巾

非 婦人の徳を或

狂 袴帽子也丸のちれ袴もめ

二ハの肩乃山のいふき 與射

草のまをわつれりてのまをわつる
いづれすまのまをわつるん 光俊

⑩ 地ふれこのす物は雀の首支考
枯野のひよりりまけは皆さあれた東史

⑪ 冬枯ハこそむきりのひろくと
奥底ふれぬむむさうらん 京景

⑫ 枯野 枯野ふ同ドされもくつハ
木州の枯野なる野をいふ

⑬ 万葉云ふく時かやの古枝まき
とまきしまきなはふらんも 赤人

⑭ 冬木立 冬うれる枯木のまきと
いり多く十月の季と云

⑮ 花分むつあはひしーを木立朝三
み木立爺のまきふりしうら 昆吾

⑯ 寒艸 △冬の草。秋よりうれ残
るる艸をいふ又冬まが

霜の下にある草をいふ

⑰ 鶺鴒 鶺鴒のまき冬の艸 昆吾

冬生類

此部ハ三冬よわつる
生類とありし

鷹

鳥 鷹王よ出かーと鳥 藤目よ出

種類 △兄鷹△弟鷹△鷓鴣△鷓
△兄鷓鴣の雄 △鴨鷹△鷓鴣

△雀鷓 △雀鷓の雄 △雀鷓
△雀鷓の雄 △雀鷓の雄

△煖鳥 夜ハおのまぎ足の空をうれハ小
鳥をいふくつらまがく梢ふはるはう盟

朝この鳥をうらむとーくさうらとこは
やこれ其飛いゆく方へその日ハやうと

△角鷹 たるの大うて 鷓鴣 くるま
く大。鷹鳥のまけハ四丁五丁メ七九丁七

⑱ 狂 死んふらふらぬめとぬらぬら
いまふらぬらふらぬらぬら 貞室

右の内△このうははらう△は△あつ
さい等ハ鷹也△秋ともさる 尚月の家

見合ハ

大鷹狩

△鷹狩 △鷹野 小た
うばつらひ小鳥をとる

と秋うら大鷹をつらひ大鳥を
とるハ冬みくされも鷹狩と
いふをわらふて冬とさるうら

哥 夫木

俊頼

日影きたるのたうりれうらうら
わらのくこのよをよまうしり

ふさささひひのふきんをくも
月つたみうりせてややめや 国信

待みし今ふささかかしのわら
ふさささしその香れ下ちれ 雅経

詞 ねうり。たうり。かうぞ。かうぞ。

はしる。あふの香きふの香き

やうと尾のたう 尾のふたのねうり
ふな形の木のまぢうふくま

のされの香き。たさまの香き。さうた。

をさるる香き。さうた。さうた。さうた。

うらみよりれつてさうたのたさま

とねをふさの冷たうりれうらうら
冷。さうたの香き。あうりれ冷たうら

方とす火とくも香のたうりれのも。
いく香。山うつれくさるる山のも。

早がれ香の州はさ州。せこの香。

このぬすまを。かうぞれ雅子。いつ

まのこく。禁中(毎日)こよのこく

かたは [解] かたはの小せ。せはれ後

世(い) 結場のさうた。定(か)をさうたの月

雪 香(か)をさうた。さうた。さうた。さうた。

結場の名所ハ春日也。和交野河内

其外亦いふ也。池の底の長さハ次ふある

俳 六(い) ぬ特々り里夜具其角

凍りさるる入候りてうぬくもる 簾光

詩 鷹狩七字對句 詩礎

新豊樹裡行人渡 騎似雲

新曲豆トイフトコロノ樹木々々

小死城邊獵騎廻 帶禽歸

小苑城 今夕リヘタカリノ人カ馬

ニワウテカヘルノデアウタ

詞 鷹ノ詞

無名氏

故鷹制・鏃北風・迴草・盡

平原使馬・開・如却月

野馬・上角弓・如却月

當場意氣・射生來

ノゴトクカカニトラセユニ射セト
スルカリバ、イサテニイモノジヤ

追鳥狩 列卒をりつ 雉を追
出〜く〜ら〜は〜

狩場 雉 鷹いふりつ
木居 止片

鳥は落州 落州。鷹小遣れ
小鳥の落る所

の艸なり 落草とモクイ 西のた
がの事ふらひなけし 季と 落之

力草 力くの鳥をるく 艸を
ち〜〜〜つ〜む〜い〜

哥 けはたかの老のまぬのたうて
このひもまたち〜〜〜行 足

教草 鳥あつ所をたうて
ち〜。宿の鳥を落る

ところを落州とつ 其落州の〜
を羽をい〜〜〜を〜

ぬす立 ぬす立鳥。ぬき立鳥
鷹狩と鳥のおそれ 艸

か〜〜か〜ま〜る〜が〜む〜そ〜ふ〜飛〜とい〜
又たふひい〜艸のかけを飛をい〜

鳥立 鳥の立はち〜い〜この
所〜狩人のゆ〜

哥 新古今 五七のふりやちるに
ほ〜〜〜も〜入〜は〜ま〜か〜た〜て〜匡房

鷹匠 た〜つ〜人〜を〜と〜び〜た〜
ま〜〜も〜鷹師〜も〜い〜

列卒繩 セ〜い〜せ〜ら〜子〜とい〜こと
〜〜〜追〜ん〜る〜あ〜とい〜

鳥叫 鳥をりつ 鷹とよ〜とい〜 枝折
又狩人の声は〜い〜た〜と

追 追をるとつ 又鳥のさけふ 声を
聞〜 鷹人のた〜と〜び〜る〜とい〜

雁鳥犬 狩杖。鷹ウリのウリ
連々、四く犬と鷹鳥犬と云

狩杖、鷹狩のとき引四く犬は
いぢいひるたつより杖より

千鳥 正字衛と書(墨)を千鳥
言葉よて季亦用い来け

物ハ奥の詞の條ニ印有見念べし
千鳥ハかもし類してせきれい二似て

小江川。海。入江等水辺上在て群
し。沼はくびくうくは千鳥と云ふ

哥 夕夕れハ佐保の川糸の川風よ
友中よりくくくくくくく 友則

風 夕夕れくくくくくくくくく
夕夕れくくくくくくくくく 頭伸

柏玉集 月前千鳥

雪玉集 濱千鳥

月もまほもきよさほせに

月もまほもきよさほせに

同 泊千鳥

月もまほもきよさほせに

同 湊千鳥

月もまほもきよさほせに

碧玉 岸千鳥

月もまほもきよさほせに

詞 △川子者 △村子者
△小夜千者 △夜千者 △浦千者 △友千者

△浦千者 △友千者 △友千者 △友千者

△友千者 △友千者 △友千者 △友千者

△友千者 △友千者 △友千者 △友千者

△友千者 △友千者 △友千者 △友千者

汝の池北化したるの藝州廣嶋より出た海中に竹垣を立て自ら取付くがごとくあるとて又いけちく場所を養ひて諸州よりくゆふ味も中和を得くよし自然生のり此は大きくても味不佳

⑩ 非 産 てもういふ九の坊万籟 坊むきや我ふ八のぬ水も其角

蠣舟 浪花川岸所々舟と共てかゝる南ふ皆廣嶋より

来りて他國の者さし冬月来るを同日未だ越年して又同日ふくる

⑪ 非 蛎身の原よりつるを利全 坊ふもあつるを人の丁 委曲

⑫ 狂 坊堂くはの橋の勢きおす ころくく人のあつるを道長

鯨 鯨突△鯨舟△鉸突△勇魚 五葉出△名海鱒。雌と鯨とい

い雄と鯨とらふ鱒はと幸の事さゆへうらの形と大きと常に見立る

⑬ 非 迹の氣もけり只つぬ鱒は多鳳 勢いのかつる夫ふりくくらか金波

⑭ 狂 志まきまうら道りきてゆつてお 子紙おりふやふふぬをたり喜木

氷魚 氷魚使昔八宇治川里川 等より此魚を貢物奉也

とぞこれと氷魚の使といふ委くハ 九ノ平丁網代打の糸に見るべし

按ふ氷魚和名こほり魚といふ ⑮ 非 阿いよあふ氷魚の使や氷魚の東向

或いのつるきや打きておまは野坡 氷魚よりや置ふくは尺の屑温古

⑯ 鮎 一名サネリ。形らえせふ似て小こ した和神も形ちとせふ似たり

と出たり。白魚と似たりといふは非之 いたの坂 白魚とあはれといふて

⑰ 非 新嫁くは若く子言ふいふは瓢水 阿はれ煮る乳の下の子言ふいふ電北溟

網代 △網代木 △網代守 △網代人 川岸より木はらちて網

の廣がりたる形ありて氷魚のたぐ
よひくいれを再び出るを得ざる
やうにさう細のかりにさるやへ
さうといふ意にてあつろこのは是す
くひ取らるゝと網代も網代守も
くま委しく九月生類四十二丁ふ出

哥拾遺集

元輔

月影の田上の川よきまゆけきい
あつろのひこのよきまゆけきい

新古今

慈田

網代まよひさよふまよひのまよひく
いとりやねぬる宇治の橋いえ

金葉

皇后宮肥後

あまのよる川せよあまの網代まよひ
あまのよる川せよあまの網代まよひ

夫木よきまゆけきい
磨のまよひうねつりりる 貫之

あまのよる川せよあまの網代まよひ
あまのよる川せよあまの網代まよひ

あまのよる川せよあまの網代まよひ
あまのよる川せよあまの網代まよひ

夜與引

冬の夜山中の獸を狩時犬
を引くこれをよきまゆけきい

柴漬

柴とふーとつ古言生柴
と枝葉とも三四尺つふ切

く川水の浅きところ積事水の面
より少高し左をれ雑小魚柴の下

ふ集るくふおひく細を四方ふ張て
柴を去れハ魚とくくゆふ入これ

寒き時の時れまき立春後川水は
たふふたうてハ魚柴の下ふ集らば

。淀伏見其外所々ふたれどもとて
て水の浅き所やぐまは事やう

あまのよる川せよあまの網代まよひ
あまのよる川せよあまの網代まよひ

竹筍

△△△ 魚柴の末ふけ置
このことれりのり魚柴に

のびらばうけ入る器に竹やう作る
能やう見て機縁のさハ井をハニ又

あまのよる川せよあまの網代まよひ
あまのよる川せよあまの網代まよひ

納め貯ふ用もくは板の上にてよく
わきまをこしつゆの汁のどろどろ
煮るなり或ハ塩酒魚鳥などく
いづれも煮たり僧家初

非 此句も禅僧の意をあらわす
許六

狂 酒豆の汁はさうの好ぶゆめ
とあふふるからとれども 百松

袖味噌 非 破障まつくく尾の
油 とうり耶 北混

蕎麦湯 蕎麦の粉と湯を和し
て喰ふを蕎麦湯といふとばあち
蕎麦の粉と文火にて焚く時ハ

ゆめのおとくまるをだー汁をかり
て食用といふとばあちといふ

非 蕎麦湯やあぢなの下を天我
○右飲食のふい温熱を賞して喰ふ

冬(冬)の季に。製法委しく日
本歳時記より出見るべし

文化戊辰末秋發行

